

プロローグ 小説投稿は出会いのはじまり

「よし！ これでいいか」

一人きりの部屋に、達成感に満ちた声が響く。

慣れた手つきで画面上のボタンをクリックし、最も有名な情報発信ツール、ツブヤイターとの連携も終わらせた。

数秒後、タイムラインに『投稿しました【R18】爆乳ロリサキュバスのお楽しみタイム』と表示された。

ときおり、インターネットを使って小説を投稿している。タイトルと表記からわかる通り、男性が責められる大人向けのものだ。

半年前に活動し始めて、これで四本目――

人気があるわけではないし、そこそこの知名度すら有していない。そう数字が示している。僕の文章に魅力がないから人が集まらないのか、知られていないだけなのかまではわからないが。

それでも続けているのは、ただ単純に書くことが好きだから。子どもの頃から、頭に思い描いた物語を文字にする癖があった。

努力の証をじっと眺めていると、通知が一つ二つと増えていく。覗いてみると、投稿作品に反応してくれていた。

感謝の気持ちが溢れんばかりに生まれ、心が震えるほど幸せになる。

落ち着いてくると、パソコンを点けていたこともあり、そのままネットサーフィンに突入気になる動画を観たり、自分に合いそうな作品を探してみたり……そんな感じでページを開いては閉じてを繰り返す。

数十分後、ツブヤイターに戻ってみると、通知がまた一つ増えていた。

その内容にも目を通してみる――

『七草氏、久々のサキュバスものの存分に楽しませてもらったでござる。やはり爆乳ロリサキュバスはボクっ娘が一番でござるな。それでスク水とは恐れ入ったなり。ボクっ娘爆乳ロリサキュバスのスク水着衣バイズリ、最高すぎてめっちゃ濃いの出た！ 次も楽しみにしてるでござるよ』

七草氏というのは、僕のことだ。初芽七草(はつめ ななくさ)という名で執筆活動をしている。実名じゃないのは、言わなくてもわかるだろう。

それで、リプライを送ってきた人は、細川フトオさん。本名や顔まではわからないが、いつも親しくしてもらっている。たぶん……いや、絶対に男性。呟きからそう断言できる。

以前、学校行きたくない。女の子様のおもちゃになれるのなら行くけど……みたいなことを呟いていた。そのときに、授業についていきませんよと返信したら、予想外の言葉が返ってきた。

『授業教える側だよ』

彼が職務を全うできているのか、とてつもなく不安になる。とはいっても、こういう人に限ってオンオフの切り替えがすさまじく、凄腕教師の可能性もあるからなあ。現実というのは、恐ろしくて面白いものだ。

ネット友達で教師であろう彼は、初めて感想を送ってくれた読者でもある。処女作からの付き合いで、今回もコメントを書いてくれた。引いてしまふ感じの内容と口調だが、とてもありがたく思っている。読むだけでなく、使ってまってくれるなんて。

『ありがとうございます。属性を混ぜ過ぎたかなと心配でしたが、楽しんでいただけて何よりです。そうですね、爆乳ロリサキュバスとボクっ娘の相性は最高ですね。また細川さんとサキュバス談話したいです』

返信を終え、ベッドの上に寝転ぶことにした。疲れがたまっているのか、このまま横になっていれば、すぐに夢の中に旅立ってしまいそうだ。

それでも、今寝るのはさすがにまずい。昼寝にしては遅すぎるし、ガチで寝るには早すぎる。

今の時刻は午後六時。母親が夕食の準備をしながら、部活をしている子どもの帰宅を待っている時間帯。父親は帰っている……方が珍しいだろう。とはいっても、今日は休日。ずっと家にいるし、父だって仕事を休んでいる。

もう少ししたら、晩ご飯だ。どんな料理になるんだろう。カレーライス、それとも肉じゃがかな。

そんなことを考えていると――

降りてきて。そう大きな声で呼ばれた。生まれてきてからずっと耳にしている母の声だ。

何の用事かは知らないけど、降りてこいと言われたら降りるしかない。渋々ではなく、期待しながら階段を下りていく。

外食に行こうだって。

母の愛情と苦労がこもった手料理も好きだが、外食は外食で良いものがある。

その提案を快く受け入れ、家族全員で近くのファミレスへと向かうことにした。どれほど美味しい物を食べるかより、どれだけ楽しく食べるかを重視している僕にとって、ファミレスはうってつけなのだ。

「はああ！？　なんだよこれ……」

心も体も満腹になった僕を待っていたのは、驚愕の事態。驚きのあまり、それを表す言葉が口から出てしまっている。

ある点を除き、いつもと同じツブヤイター。通知欄がとんでもないことになっていたのだ。四リツイートぐらいされれば好調と思っていた投稿作品が、二十リツイートもされていた。

一体なぜ？　誰のおかげ？　僕のような人がどうして？

恩人たちを辿り、一つの結論にたどり着く。

「サキュの宮先生……」

同人サークル『サキュバスパレス』主催者、サキュの宮先生が、僕の作品に興味を示してくれていた。

めっちゃシコなイラストを描くサキュの宮先生は、活動し始めてまだ二年ほどしか経っていないのに、特定の界限で大変な人気を博している。

名前の通り、サキュバスものをメインにっていて、男がことごとく負かされる内容ばかりだ。それが、屈強な雄であっても未成熟であってもお構いなし。

一週間ほど前に販売したCG集が、もう五百を超える売り上げを叩き出した。もちろん購入済みで、今でも夜のローテーションに入っている。

個人的神絵師が、僕の小説を広めてくれたおかげで、普段よりも多くの人の目に留まったのだろう。

さらに驚くべきことに、サキュの宮先生にフォローされていた。予想外の出来事に、震える手でリフォローをする。そして、覚悟を決めリブライ——

『ありがとうございます。サキュの宮先生のイラストはいつも見えています。新作も購入しました。あの尻尾ホールが最高で、ラストの差分とセリフがめっちゃシコで何度も使っています』送り終えてから、いきなりは失礼だったかな、ああ言えばよかったかなと後悔してしまう。細川さんのような慣れた相手だと、こんなこと思わないのになあ。

その数分後——

『フォローと感想ありがとうございます。そのシーンは特に力を込めたので、嬉しい限りです。七草先生の新作も読ませていただきました。おっぱい愛が伝わりました。サキュバスの家畜になってしまった後が気になります。これから他の作品も読んでみます』

尊敬している人から感想をただけて、かつてないほどの高揚感に包まれる。一つ一つのコメントが創作の支え。この言葉が、全身に身に染みわたっていく。

幸せを噛みしめつつ、再度返信する。

『これからも先生の作品を購入します。次回作も楽しみにしています。今年もコミフェに出ると聞いているので、今から新刊が楽しみです。それと、いつものようにDL販売はありますか』

コミフェというのは、コミックフェスティバルの略称で、年に二回ある特別な三日間のことだ。全年齢から成年向け、意外なものまであり、好きなものをみんなで共有しあう場所らしい。行ったことないせいで、詳しいことはわかっていないけど。

サキュの宮先生はこれまで何度か参加していて、今年もサークルとして参加すると呟いていた。

『新刊はまだはつきりと決まっていなくて。それでも、いつものスタイルは変わりません。もちろんDL販売も予定していますので安心してください。七草先生の新作も楽しみにしています。お互いがんばりましょう』

『僕もサキユの宮先生の新刊楽しみにしています。いつも応援しています』

こうして、尊敬している作家先生との会話は幕を閉じた。これからも、迷惑に思われない程度に話してみたいな。

幸福の熱が冷めないまま、夢の中へと旅立てる……わけがなかった。情欲の熱も同時に沸き上がっていたのだから。

何もかも忘れて、知能指数をとんでもないほどに下げて、一時の快楽を味わいたい。先生の作品に、自身のたまりきった欲望を吐き出したくなってくる。

寝る前に運動をすると、眠りやすくなるのは本当のようで、瞬く間に意識を手放した。

第一章 放課後の教室にはぼっちなサキュバスが棲んでいる

窓から差し込む日差し。騒がしく感じるほどの外の活気。耳元で鳴り響く、眠りを妨げる音。朝を告げる数々の要素に、徐々に意識が覚醒してくる。

いつもの月曜日。この日は、どうしても憂鬱になる。酷いときは、動く気さえ起きなくて……今日はそういう気分だ。

欠席が重なると単位がもらえない。週明けの授業は楽だったよな。授業内容を聞く人がいないせいで、休んだらついていけない。

学校に行く理由をなんとか絞りだし、ふらふらとした足取りで、ベッドを後にする。階段を降りると、当たり前のように朝食が並んでいた。

ホクホクに炊かれた白米。湯気を立てていて温かさが伝わる味噌汁。新鮮な野菜で彩られたサラダ。海の恵みである鮭。元気な乳牛から搾られた栄養満点のミルク。

最高の品揃えに、眠気は一気に吹き飛んだ。

母に感謝しながらも、必要なエネルギーを補充していく。箸は止まることなく動き続け、遅くなる気配もない。

充実した学校生活を送るには、この時間は大切だ。数秒で栄養を摂取できるゼリー飲料が売られているのは知っているが、頭を目覚めさせるためにもしっかり食べなければ。

それが終われば、歯磨き、着替え、気象情報の確認。朝のルーティーンワークをこなす。そして――

「行ってきます！」

玄関を出るときは、いつもの挨拶を忘れない。

もちろん、お馴染みの言葉が返ってくる。その声に元気をもらい、自宅を後にした。

小さな電車に詰め込まれ、目的地まで運ばれていく。そこは、スマホを取り出す余裕もないほど窮屈な世界。

降りるときに口喧嘩が始まったが、それもよくあること。ふくよかな女性が、冴えないサラリーマンに暴言を吐いている。

あんなに混雑していたら、ぶつかって当然だろ。偶然手が当たることだってある。それなのに、あんなことを言われて……運がなかったというしかほかはない。そして、被害にあわなくてよかったと安心するばかり。

次は徒歩。同じ服を着た人たちが同じ方向に向かって、黙々と歩いている。それに倣って、同じように歩く。

複数になって話している人の中にはいるが、僕たちよりもペースが遅く、無自覚の内に広がっている。交通の邪魔になっていることなんて、まったく気にしていないようだ。

彼らの話題は決まっていて、昨日のテレビ番組や芸能人関連、ソシャゲー―特にガチャの結果。基本的にこの三パターンだ。会話内容は、ヤバイを筆頭に、マジやウケル、ワカルのコラボ。到底真似できそうにない。

しばらくの間歩き続ける。時間にして数十分。たったそれだけなのに、スタミナのなさど夏特有の強い日差しのせいで、疲れが見えてくる。慣れた道だというのに、へとへとになる自分が情けない。

予鈴直前に校門をくぐりながら、靴を履き替え三年生の教室が並ぶ四階へと向かうイメージを立てる。何百という数やってきたこともあって、ロボットのようは無駄のない動きになると思っていた。

だが、その通りにはならなかった。いつもの下駄箱に、手紙が置かれていたせいだ。手紙というと、ラブレターを想像してしまう。でも、本当にそうなのだろうか。ラブレターを渡す文化は廃れているらしいし、ハートマークのシールはどこにも見当たらない。すべて白色で、事務的な雰囲気を漂わせている。

宛先は……うん、僕の名前だ。入れる場所を間違えたなんてドジでもなさそう。軽い気持ちで裏返す。差出人が記載されていたが、目を疑うものだった。

サキュバスより――

「へえ？　なんで……？」

その名を見た途端、心拍数が急激に上昇し、みつともなさすぎる上擦った声まで出してしまふ。幸いなことに周りには誰もおらず、冷たい視線を向けられることはなかった。さっきのは錯覚。そう信じて、もう一度……。

サキュバスより――

相も変わらず『サキュバス』の文字が浮かんていた。

サキュバス、それは男性を淫らな夢に誘う女性の悪魔。様々な伝承が残っているが、それはひとまず置いておいて、彼女はエッチなコンテンツに頻繁に登場している。

サキュの宮先生のようなサキュバスをメインに描いている方もいるぐらいで、僕も昨日サキュバスものの小説を投稿したばかりだ。

そんな単語を学校で目にするとは思っておらず、落ち着く気配のない頭と震えが止まらない手で、本文を読んでいく。

『放課後、教室で待っていてほしい』

たったこれだけの内容なのに、なかなか飲み込めずにいる。

なんで待っていてほしいのか。自分の教室を指しているのか。出会ったらどうなるのか。そもそも、本物のサキユバスからなのか。

数々の「なぜ？」が浮かび、氷解できないまま増え続け、思考回路がショートしそう。

ひとまず、手紙をカバンに入れ、サキユバスに心を奪われた状態で歩き始める。

予想外の出来事に時間を取られたが、なんとか本鈴前に席に座れた。

怪奇現象に遭遇したときの心臓のまま、ひたすら考える。

目立ったことは何一つしていないはずだ。悪いことだっと思っていない。強いて言えば、みんなに好印象を与えるために、仮面を被って学校生活を送っていただけ。

男友達がいなければ、当然女子との接点もない。雑用を頼まれば、決まりきった言葉で答える。ただそれだけの関係だった。

そんな僕に、ピンポイントであんなものが来るなんて……。

あれか、未経験なのが原因か。この年頃だと、みんなカラオケ店とかでセックスしてるんだろ。この前だって、あいつとヤツたんだよみたいな会話が聞こえてきたし。保健体育で、女生徒を孕ませた男子の体験談を聞いたばかりだ。

そういえば、女性を知らない男の味は、とても美味いらしい。エロ漫画の情報だけど。性欲旺盛の思春期童貞という、サキユバスが一番好む体質だから選ばれたのか。それなら納得できる。

夕日で朱く染まり始める教室に、突如として現れる淫魔。そして、彼女の性奴隷に、もしくは人外のテクニクで命そのものを搾り取られ……ブンブンと頭を振る。

どんな理由で誰が送ってきたのかは、もうじきわかることだ。エッチなコンテンツのような展開を想像することはやめにしよう。

掃除時間も終わり、まばらな教室。

そんな中、机で本を読むふりをして過ごしている。文章を追わず手紙のことを考え、ページをめくると同時に室内を確認する。

友達を待っている人や日直が、まだ残っていた。そんな彼らも、時計の針が進むにつれて帰っていく。

そして——一人の女の子だけが残った。

このクラスになって半年は経っているというのに、名前がわからない。それどころか、クラスメイトだったかなと思ってしまうほどで。

彼女も読書中で、僕と違い相応しい姿だ。その様子に心を引かれ、もっと観察してみたい衝動に駆られる。

真っ先に抱いた印象が、周りと比べて地味だということ。目立ちたくないというオーラが

全身から溢れているせいで、そう感じてしまう。

どんな色にも染まらない漆黒で、耳を隠した首元までの髪。赤ぶちメガネ。控えめな胸。地味属性に拍車をかける女性パーツばかりだった。

服装は、当然の如くみんなと同じ夏服。白を基調とした制服から、折れてしまいそうに細い腕が飛び出している。スカートからは、容姿に似合わないむっちりとした太もが伸びている。

わかりやすく表現するならば、ライトノベルに登場しそうな文学少女——二次元美少女のようだった。

その姿に見惚れていると、目があってしまう。メガネの奥にある小さな瞳に、じっと見つめられる。僕の眼も彼女を映す。

だが、それもほんの一瞬。いつもの癖で、すぐに視界から外す。目を見るなんて、恐ろしくてできるわけではない。

そう思っているはずなのに、彼女の美しさに頭を支配され、もう一度見たいと望んでしまう。

また目と目が合った。どうやら、見続けていたらしい。

そして、なぜか手招きをしている。ここは外国ではあるまいし、このジェスチャーはこっちに來いと考えるのが一般的だ。

僕を呼んでいる。行かないと、失礼になってしまう。悪い印象を与える行動は、ここで生活するうえでしないと決めているんだ。

怪しみながら、彼女の机に足を運ぶ。

「キミに手伝ってほしいことがあって……」

「て、手伝って……？」

知らない人からのお願いに困惑し、無意識に復唱してしまう。

「そう。これを手伝ってほしいの」

一枚の紙を取り出しながら、そう口にした。これってたしか、学級通信に載せる文章の下書きだったかな。よく見ると、『<ruby>咲ノ宮瑠瀬</ruby>の みやるせ</ruby>』と記されていた。

「咲ノ宮さん？ いいかな？ どうして僕に？」

「文章書くの慣れてるでしょ。前の体育祭の意気込みでそう思って……」

前半部分で一瞬慌てたが、前回書いたものだったらしい。

「ありがとう……」

些細なことでも、感謝を忘れない。それが、好印象を得るスキルだ。

「こちらこそ、面白いものを読ませてもらったわ。学校に情がない感じなのに、いいものを書く……あつ、ごめんなさい」

学校という世界を全力で楽しんでいないのは確かだが、実際に言われるとカチンと来る。内容を褒めてくれて、失言も謝ってくれたし、帳消しにしてあげてもいいけど。

「それで……手伝ってほしいってわけ？」

「ええ……」

断れば、嫌な気持ちにさせるのはわかっている。でも、面倒そうだしなあ。

「ダメかしら？」

声の調子を変え、上目遣いで求められる。経験したことのない感情に襲われ、頭がクラツとしてしまい……気が付いたら二つ返事で承諾していた。

「助かるわ。その……夏休みどうしたかったものなんだけど……」

何ともありきたりなものだ。そうは言っても最後の夏休み。過敏になるのも仕方ない。

「えっと、咲ノ宮さんはどんなことするか決めてるの？」

「コ……これといってないわ。したいことするだけだし……」

「うーん、もっとこう……受験勉強とか友達と遊ぶとか、学校らしい感じがいいんじゃない？ あと、最後のなんとかみたいない……」

「内定はもらってるし、友達はいなくて……」

「うそ！？ もうもらってるの！？ どこ？」

「そ、その……美術の専門……」

「絵描けるの！ 見せて！」

「いや……それはちょっと……これをやらなきゃだし」

たどたどしい口調で、課題を促される。

「そうだったね、ごめん、ほんとごめん」

喋ったことがなかったのに、いきなりこんな話をするんじゃないと思った。親しくない相手の領域に踏み込んでしまえば、またおかしな人扱いされてしまう。

そんなことより、受験はなくて友達とも遊んだこともない。それだったら、材料に困るのも納得できる。

ん？ 友達がいないだって？

同類がいて、心が安らぐ。彼女もぼっちだったのか。

「なんでそんな顔してるの？」

今の気持ちが表情に現れていたのか、刺々しい言葉が発せられた。これは、絶対不快にさせたんじゃない。嘘をついてもすぐバレそうだし、正直に謝ろう。

「ごめん。友達いないの同じだなんて……」

「うっ——学校にいないだけだから！」

ネットにいっぱいいる。ゲームで会える。頭の中にいる。そのパターンのやつだ。ちなみに、僕もネットには数人いる。そういう点でも一緒ってことか。

「大丈夫。僕だってそうだし……っと、さっさとやっていこ」

「そうね。どんなのがいいかわかった？」

「えっと……学校が気に入るような内容でいいんじゃない？」

「というと？」

「学校生活を楽しんでいる人たちに、視点を合わせる感じ？」

なぜか疑問系で答えてしまった。決まりきった対応ができない会話ほど、難しいものはない。もうダメだ。あのときこう言えばよかったと後悔するのが、容易に想像できる。ベッドの上で今日のことを思い出して、転げまわるに違いない。

僕たちの経験や気持ちで書かれたものなんて、誰も望んでいない。だから、リア充になりきってみるべき。こういうことを伝えたかったのに。

「う、うん……何となくわかったわ」

理解してくれたようで、一安心。

書き始めている咲ノ宮さんを、じっと見守る。

脳内で構成を練っているのか、ペンを動かす速度が遅い。それでも確実に……少しずつ……遅筆ながらも進めている。

見た目通りの綺麗な文字が、浮かんでは消えていく。

言葉選びに困ったり筆が止まったりしたら、ない知恵を絞ってアイディアを出して――

「終わった……」

六百字詰め原稿用紙に、咲ノ宮さんの言葉がぎっしり敷き詰められる。偽りの気持ちだとしても、必死に考えた文章だ。その達成感は、相当なものではないだろうか。

「助かったわ。ありがとう」

「いや、僕は何も……ほとんど咲ノ宮さんがやってたし……」

「キミの力がなかったらできなかった」

軽いお礼なら両手で数えられるほどはあったが、こんな感謝のされ方は初めてで、ついっ胸が温かくなってしまう。

「おかげで良いものになったわね。……もしかして小説とか書いたことある？」

突然の質問に、動揺を隠しきれない。

あると答えるのが適切だ。けれども、自分の欲望を具現化しただけのエッチな小説で……。

しかも、女性上位ものの。

こんなことを知られたら、ただでは済まされない。学校生活終了、いや、社会の学校化が進んでいる今、人生までもが終了する恐れがある。

「いや、それは……ない、かな」

怪しい感じになってしまったけど、なんとか否定できた。これで大丈夫かな。

「それは惜しいわね。やってみるといいんじゃない？ 感想たくさんもらえそうだし」

その言葉には説得力がある。咲ノ宮さんに前回の学級通信を褒めてもらったし、作品を投稿すれば、いつも細川さんからコメントをもらえている。昨日は、尊敬しているサキユの宮先生からもいただけた。

「ありがとう。ちょっと考えてみるよ」

素直にお礼を述べ、ここで話は終わった……と思ったのだが、咲ノ宮さんの瞳は何かを訴えかけているように鋭く輝いていて、その口から新たな話題が発せられた。

「ところで、ツブヤイターってやってる？」

「いきなりどうしたの!？」

転換が急すぎて焦りを隠せない。それに話題が話題だ。焦るに決まっている。どうしてそのツールが出てくるんだ。

「やってたらでいいの。教えてくれない？」

「面白そうじゃなかったからやってないんだ。誘ってくれる友達もいなかったし。今からやっていいのかなあ……」

今度はしっかり誤魔化した。

住居が知られたら困るのと同じで、アカウントがバレたら困る。それはもう大変困る。周りと使い方が違うことも相まって、なおさら知られたくない。

随分昔に、名前を覚えているクラスメイトをツブヤイターで検索したことがある。すると、アカウント名が本名。プロフィール画像が自撮り。部活仲間らしき人と写った写真の眩き。

そして、学校名とクラスが自己紹介文に記されていた。この学校に所属している者です、仲間ですよと主張する使い方だ。

そうしていない僕は、誤魔化さなければ人生が危ない。

一時しのぎの嘘を言い終わって安心していると、女の子らしいケースのスマホを突き付けられた。

「これ、キミのだと思ったんだけど……違う？」

頭がフリーズする――

その画面に映っているのは、誰よりも目にしたことがあるプロフィール。そう、僕のアカウント『初芽七草』だった。

これって、ネットでたびたび話題に上げられている身バレってやつ？ 清楚な雰囲気を漂わせている咲ノ宮さんに？ もしかしたらクラス全員、下手をしたら学校中にバレていることだって考えられる。

身バレに繋がる眩きは、何一つしていないはずなのに……どうして？ これってダメな

んじゃない？ 学校生活――いや、人生終了？

あまりの驚きと恐怖に、世界全体の時間が止まる。しかし、それはただの錯覚で、無音の教室に時計の音だけが響いている。

「な、なんで……？」

数秒？ それとも数十秒？ どれぐらい経った後なのかわからないが、ひとりごとのように発した。それは、勝手に口から出たものだ。思考する機能が、疑問で埋め尽くされてまったく働かなかった。

「もう少し別の言い方があったんじゃない？ 誰それとか……。なんでって言葉、肯定してのようなものよ」

容赦ないがその通りだ。「どうして僕のアカウントを知っているんですか？」という意味にも置き換えられる。要するに、これが自分のアカウントだと認めてしまったことになる。

「え？ いや……それは……その……」

彼女の瞳には確信めいたものが宿っていて、否定しようにも否定できず、誤魔化すことすらできない。

心が押しつぶされて、もう耐えられない。この場から逃げてしまえば……明日が怖くて学校に行けなくなる。

できることといえば、もうこれしかない――

「僕です……それ僕のです！　なんで知ったのか知らないけど、絶対……絶対他の人に言わないでください！　お願いします！　何でもしますから！　それがバレたら……」

冷たくなった床に頭を擦り付け、必死の懇願。どんな酷いことをされてもいいという覚悟で、恥辱にまみれた土下座をする。同級生ではなく、奴隷と女王様のようなだった。

「ん？　今何でもするって言ったわね。じゃあ……顔上げて。私が悪いことしてるみたいじゃない」

だが、屈辱的なことは何一つされなかった。それどころか、慈愛に満ちた言葉を発した。意図が読めず、いまだに平静を取り戻せない。

「……ほら、ここに座って。……ね」

受け入れないと話が始まらない雰囲気で、困惑状態のまま誰かの椅子に腰を下ろす。

「その……キミの文章と七草先生の書き方が似てる気がして……。別にいやらしいことなんかしないし、他の人にも言わない。あと……こんなこととして本当にごめんなさい……」

僕の学級通信と、初芽七草の小説が似ていたから確認したかっただけらしい。どこで判断したのかはわからないけど。

『バラされなくなったら、私の命令に従ってもらうわよ』という、エッチなコンテンツによくある、身バレして人生詰んでしまう展開じゃなかったのか。助かった……。

待てよ。さっきの言葉に、ひっかかるものがある。

初芽七草の書き方と似ている気がした。そう言っていたよな。ということは、清らかなオーラを纏っている咲ノ宮さんが、淫らな欲望を垂れ流しただけの小説を読んだことになって……。

「あの……咲ノ宮さん？」

「どうしたの？」

「僕の……その……あれを読んだの？」

「そうだけど……昨日話したでしょ」

「昨日!？」

おかしい。家族とファミレスで食べただけで、ずっと家に引きこもっていたのに。

「ツブヤイターのリプライ、覚えてない？」

「え……えええッ――!？」

リプライ。その単語に酷く驚く。

昨日は、細川さんとあのサキユの宮先生としか話していない。細川さんが学生のはずがな

いから、消去法から必然的にそうなる。

「サ、サキユの宮先生!？」

「ようやく気づいてくれたみたいね」

「そ、そんな……」

同じクラスの咲ノ宮さんが、いつもお世話になっているサキユの宮先生……だと……。確かに、どこことなく名前が似ているような。

そうだとすると、男を射精させるためだけのイラストを描いているなんて、にわかには信じがたい。美術の専門学校に行くらしいし、写生自体は慣れていると思うけど。

「まだ信じない？　だったら……」

ノートを取りだし、白紙のページにペンを走らせていく。その動きは卓越していて、軽快なリズムが生まれている。

現状をまったく理解できていない僕は、その行動を黙って見続けるしかなかった。

次第に女の子の輪郭が浮かび上がってくる。しばらくすると、見覚えのあるものになっていき……というか、昨夜使ったばかりものだった。

「ふう……アナログは久々だったけど、これでわかったかしら？」

咲ノ宮さんが、サキユの宮先生のイラストを描く場面を目撃してしまった。見てしまったからには、もう信じるしなくて。

情けない顔をしているだろうけど、そんなことに構ってられない。この事実を脳に教え込ませようと必死になる。

「信じてくれたみたいね。さつきからそうだって言ってたのに……」

「ちょっと待ってよ！　こっちはわけがわからないんだけど。なんで僕なんかバラしたの？」

自ら正体を晒すのは危険すぎる。公にしにくいものなんだから、なおさらだ。

「同業者だし、信頼できそうだったから。ただそれだけよ」

「……う、うん、わかった。ありがとう」

信頼できそうと思われていて、自然と感謝の言葉が漏れる。常日頃から、好印象を与える仮面を被っていた甲斐があった。

そんなことより、同業者と認められると、なんだかむず痒い。僕なんか先生の足下にも及ばないのに。

「それで……話は変わるけど……と、友達になってほしいの！　趣味が合いそうだし……キミともっと話したいし……」

「えっと……こちらこそお願いします！」

断れるわけがなかった。

トラウマのせいで好きなことを隠していた僕にも問題があるのだが、今まで趣味を共有できる人に出会えなかった。みんなの輪に入るためだけに、趣味を合わせていくことはしたくないし、さらけ出したらいいじめの対象になる。そのせいで、友達がまったくできなかった

のだ。

趣味の合う人が見つければ、一等の宝くじが落ちていたときのように、食いついてしまいうに決まっている。

「……ありがとう。これからよろしくね」

目をそらさずに、相手の顔を見続ける。自分でも驚くほど、じっと見つめることが出来た。咲ノ宮さんは、美しさと可愛らしさが混ざった笑顔を作っていた。きっと、僕も素晴らしい表情をしているに違いない。

「さっそくで悪いけど、七草先生のサインをもらえないかしら？　こういうのは持っておきたいもので……」

なに？　サインって、芸能人とかがよくするあれ？　それ相応の色紙を渡そうとしているし、本当に書かせるつもりらしい。

「無理だって。有名じゃないし、考えたこともないんだから」

「ダメ？　だったら、また今度お願いできる？」

「うん……いつかね。それよりも、サキュの宮先生のは？　あ、いや、よかったらいいんだけど」

「私？　いいけど……ちょっと待ってて……」

シュツシュと素早い動きで、ペンが音を奏でる。

「……大切にしてくね」

同人サークル『サキュバスパレス』、サキュの宮先生のサインを受け取った。文字が記されているだけなのに、なんとという神々しさだ。

「ありがとう。しっかり保管しておくから」

「七草先生のも楽しみにしてるわ」

「うう……」

尊敬している先生からサインを頼まれるなんて。早い内に決めておかないと。

それにしても、先生呼びはいつまで続くんだ。恥ずかしいというか、くすぐったいというか。

「その……先生っていうのやめてほしいんだけど……」

「呼び捨てなんてできないわよ。一つでも作品を残している人は先生でしょ」

作家先生を呼び捨てにはできない。その意見には賛同できる。

彼らはコンテンツを生み出すだけの機械ではなく、実際に存在しているのだ。それを忘れないためにも、必ず敬称を付けている。

「そういう考えもわかるけど……僕も、サキュの宮先生って言ってるし。でも、ちょっとあれで……」

「それじゃあ……七草さんでいいかしら？　私のこともそう呼んで構わないから」

「わかった。サキュの宮さん、かあ……」

なんだか距離が縮まった気がした。この言い方は、ネットの世界だけってのはわかってい

るが。

リアルの友人関係を築いた僕を祝福するかのように、チャイムが鳴り響いた。それからしばらくすると、下校時刻十分前の放送が流れ始める。

時計を見ると、もう六時前。夏ということもあり、そこまで暗くはなっていないが、遅いことには変わりはない。いつもならば、早々に帰宅して、自分の部屋に引きこもっている。それなのに、まだ教室に残っている。しかも、咲ノ宮さんと二人きりで。なんて甘美なんだ。成年向けコンテンツだと、エッチな展開になりそう。

放課後の短い時間で、濃い経験をしたなあ。クラスメイトに身バレした。そのクラスメイトが、あのサキュの宮先生だった。そして、友達になることが出来た。

ラノベ風のタイトルにすると、『クラスメイト（エロ同人作家）に身バレして人生詰むと思ったら友達になりました』みたいな感じになるのかな。

とにかく、今日学校に行って本当に良かった。

でも――

「夢じゃないよな？」

現実離れたイベントが続けざまに起こると、誰だってそう思う。

「だったら、現実じゃ絶対にできない気持ちいいことしてみる？」

「それって……」

「キミは何もしなくていいから。私に任せれば、すぐに天国を見せてあげる。普通じゃ体験できない最高の快樂。それを徹底的に味わってみたいでしょ？ 首を縦に振るだけでいいの。そうしたら、満足するまでしてあげる」

淫らな妄想をしてしまう言い方――淫魔にでも取り憑かれたような、妙に芝居がかった台詞だった。

豹変に戸惑いを隠しきれない。

「悩むことなんてないじゃない。お互いに得のあること。頷くだけで、二人とも幸せになれる。だから……ね」

赤く艶やかな唇がゆっくりと動き、頭をおかしくさせる言葉が、次々と耳に入ってくる。

それは、オスの情欲を掻き立てるエッチな言霊だった。

温かい吐息が顔にかかる。それほどまでに近い距離。

小さな瞳が、視界いっぱいに映る。

僕たちがいるのは、蠱惑的な雰囲気醸しだしている放課後の教室。そこは、男女の愉しみを描いた物語には欠かせない場所。欲望に支配された人間が、こぞって求める世界。

今からどんなことが行われるのか、性に飢えた思春期男子には容易に想像がつく。

すべての脳内メモリが桃色に染まり、その行為が勝手に再生される。停止なんてできるはずがない。いくつもの映像が、ずっと頭の中で流れている。

そして――体中の血液が急激に沸き立ち、いたるところが熱を持ち出す。

もう耐えきれない。太陽に照らされたアスファルトの水のように、脆い理性は一瞬で溶け

てしまった。

とうとう首肯してしまう。抗えなかった。性欲に勝てるわけがなかったのだ。

「ふふっ……冗談よ。こんな簡単に堕ちてくれるとは思わなかったわ。そんなにしたかったの？　気持ちいいこと？」

腰が砕ける。みるみる緊張が解けて、とにかく体に力が入らない。

「別に……そういうことなんか……」

快楽を望んでいたのに、誘惑を振り切ったふりをする。負けを認めたくない。

「本当かしら？　まあ、悪戯もほどほどにして……さっさと帰るわよ。下校時刻過ぎちゃうし」

心ここにあらずといった状態で、下校準備をしている様子を眺める。

さっきの彼女は、男を魅了することに長けている淫魔のようで……その瞬間、あることを思い出した。もしかするとあれは――

「咲ノ宮さん、これって……」

カバンにしまっていた、サキュバスからの手紙を差し出した。

「察しの通り、私が書いたものよ」

「やっぱり……」

これも悪戯だったというわけか。『サキュバスより』なんて、驚くに決まっているだろう。

「よく僕の下駄箱がわかったね」

「名簿を見て番号を覚えてたのよ。それよりも、本物のサキュバスだと思った？　出会った

らどんなことされるんだろうとか考えてた？」

弱みを握った子どものように、からかってくる。

「くっ――それは……あつ、もう時間ないじゃん！」

誤魔化すことしかできなかった。

「ふふっ……そうね」

口元に手を当てながら笑われる。それにつられて、なぜか笑顔になってしまう。

この年になって、友達がいることの良さを実感した。

その場の流れで、一緒に校門をぐり帰っている。記憶にある限り、二人での下校は人生初だ。

無言だと気まずいし、何か話した方がいいんだよな。天気をネタにすればいいと聞くけど、「夕日がきれいだね」「そうだね」こんな感じで終わるだろ。会話のラリーなんてあったものじゃない。そもそも、天気詳しくなりすぎると、気象予報士みたいで気持ち悪いじゃないか。

どちらも黙ったまま、ひたすら歩き続けている。

一言も喋らないまま別れると思っていたところ、咲ノ宮さんが話しかけてきた。

「その……今日のことは、私たちだけの秘密にしてほしいの。住む世界が違う人に知られるのは嫌だし……」

発言に少し引かなかったが、言いたいことは十分わかる。普通じゃないとかおかしいって馬鹿にするのが、あいつらの特徴なのだから。身をもって体験したし、絶対そうだ。

記憶を遡っていたせいで、思い出したくもないワンシーンが次々よみがえってきた——好きなことを好きなようにやっていただけなのに、おかしな人扱いされて……。

つい拳を強く握ってしまう。彼らを許してやるつもりはない。

「そんなのわかってるって。バレたらどうなるか予想付くし……。ってか、話す人いないし。だから安心して」

「ありがとう」

感謝の言葉を耳にして、再び沈黙が訪れる。数分経ってもそのまま……。この空気を打ち破ったのは、またしても咲ノ宮さんだった。

「そうそう、一回目ラストの『もう我慢できないの?』ってセリフ、『もう我慢できないの?』になってたわよ」

「えっと……うん、わかった……。ありがとう。帰ったら見てみるよ」

内容を理解するのに、数秒費やしてしまった。

誤字脱字があると、萎えてしまう。エッチシーンならなおさらだ。反省しなければ。

さすがサキュの宮さん。指摘できるほど読み込んでくれているなんて、僕の何倍もしっかりしている。

「そういうのに気付くぐらい読んでくれてたんだね。その……。えっと……。どうだった?」

「昨日言った通りすごく気に入ったわよ。スク水爆乳ロリサキュバスを描きたくなったほどにね」

直に感想をもらえて、心が満たされる。それに、作品制作に刺激を与えていたらしく、嬉しさ爆盛りだ。もしかしたら、理想とするサキュバスを描いてくれるかも。

「私の新作も良かったんでしょ。あれだけ褒めてくれたんだから、いわなくてもわかるわ」

「あ、あああ——!」

穴に潜って、もう一生出たくない。冷や汗がブワツと吹き出し、この場から消えてしまいたいほどの恥ずかしさに襲われる。

サキュの宮さんにおシコリ報告をしていたのだ。それも、どのシーンがどういう風にエロかったのか具体的に。

男性の作家先生だと思って話しかけていたが、本人は女性——それも、クラスメイトだったわけで……。クラスの女子に、「その大きいおっぱいで、いつもエッチなこと妄想しているよ」と暴露するのと変わらないのでは。

「どうしたの? そんなに慌てて?」

「……昨日のセクハラ発言ごめん。気持ち悪かったよね……」

罪悪感を抱いたまま謝る。

「うん？ なに？ ……ああ、そのことね。別に気持ち悪いなんて思っていないから。むしろ嬉しいぐらいだし」

「う、嬉しい……？」

「私の絵で興奮してくれて、実際に使ってくれた。だから嬉しい。キミも、小説を褒められたら嬉しいでしょ？」

「それは……うん。けど、恥ずかしくないの？ だって、男の人のそういう……なんか……」

「そんな内容でも、頑張って創ったんだ。恥ずかしいわけがない。そう言われているようだった。」

僕はどうか？ 羞恥心を消せず、自信も持てていない気がする。いつかは、咲ノ宮さんのように胸を張れる日が来るのだろうか。

「男性作家だから女性作家だから……そんな考えは捨てなさい。同じ趣味を持つ者に、性別の差なんて関係ないわ。あと、作品に触れるときは、作者のことを考えるのもダメ。女性作家先生は全員いやらしいと思っちゃダメだから。わかった？」

「……わかった」

強く叱責される。もっともなことだった。僕が間違っていたと反省する。

この話を聴き、女性と公言している作家先生が頭に浮かんた。彼女も、咲ノ宮さんと同じ気持ちで、活動しているに違いない。

残念なことに、ここで会話が終わってしまった。

咲ノ宮さんも電車通学だったらしく、二人で乗車することになった。少ない人数とはいえ、私語は慎むべき。

隣に目を遣ると、スマホを使っていた。周りも、当然のごとくスマホに夢中。僕もそれに倣うことにした。

電源を点けて、すぐにツブヤイターを起動する。お預けにされ続けた、極上のサーロインステーキを食べていいと言われたときのような早さで。

いくつかの通知と、ダイレクトメッセージが一通届いていた。

誰から？ そう思いながら、メッセージ画面を開く。

サキュの宮さんからだ。

『これからよろしくね』

その文章を送った咲ノ宮さんは、満面の笑みを見せていた。お返しに、笑顔と一緒に返信する。

『こちらこそ。これからお世話になります』

『それはどっちなしら』

お世話になります——これには、二つの意味があったんだ。友達として、これからも咲ノ宮さんと仲良くしていく。そして、サキュの宮さんの作品を今後も使わせていただく。

返事に困った結果。

『両方だよ。咲ノ宮さんと楽しく話したいし、サキユの宮さんのイラストもずっと使わせてもらうから』

先ほどの言葉から、感想はしっかりと伝えていった方が良い気がした。すると。

「ふふっ……」

温かみのある顔で、軽く吹き出した。周りの目が怖くなったのか、すぐさま辺りを確認している。

その様子が可愛くて、ついつい和んでしまう。

彼女が落ち着きを取り戻してから数秒後、一枚のイラストが送られてきた。それは、サキユバス特製の尻尾ホールに、何もかも吸われ尽くされようとしている男性——ツブヤイターで好きといった、サキユの宮さん渾身のエッチイラストだった。

腰に力が入らないほど射精させられてしまって、淫魔の爆乳に支えられるようにしてなんとか立っている。とろとろに蕩けきった表情をしていて、快楽で口が開きっぱなし。そこから涎まで垂れている。人前でしてはいけない、みっともなさ過ぎる状態だ。

対するサキユバスは、面白いおもちゃで遊んでいるようだった。力関係がはっきりしていて、サキユバスの強さも表れている。

脳内から消せないほど見たものとはいえ、実物の破壊力はすさまじく、その妖艶なイラストに目が釘付けになってしまう。体が満足するまで眺めていたい。

いや、このままだと人生が危ない。電車内で淫らな気持ちが増幅したら、社会的に駄目になる。それに気付いて、慌ててスマホの電源を切る。

イラストを送ってきた同人作家に視線を移すと、容姿からは想像もできない、ニタアとした妖しい笑みを浮かべていた。まるで、男を手玉に取る女の子様、もしくはオスで愉しむ女王様のようだった。

「くすくす……」

ゾクゾクとした震えが全身を伝う。山椒魚に会ってしまった蛙。猫に見つかったネズミ。そして、サキユバスに敗北した男勇者。それが今の僕だった。

下校前の誘惑とさっきの表情で思い知らされた——咲ノ宮瑠瀬という少女には逆らえない。

それからは、お互いスマホに夢中になって……特に変わったことも起こらなかった。

視界の端の咲ノ宮さんが、何やらゴソゴソと動いている。もうすぐ目的地に着くんだろう。下車時に手を振ってくれた。もちろん、すかさず振り返した。こういうところは素直に可愛いんだから。そのせいで、さっきの表情がよけいに恐ろしい。

さてと、僕もそろそろ降りる準備をしようか。

玄関を踏むと同時に、母が心配してやってきた。下校時刻になると、帰宅部のエースよろ

しく速攻で帰っていたからなあ。

「友達と遊んでただけだから」

詳しく話すのも面倒だし、簡潔にそう告げる。なんで、喜びと驚きが混ざった声をあげるんだよ。息子に対してそれは酷いだろ。

自室にこもって、パソコンを点けてすぐツブヤイターを開く。この流れは、もう日課になっている。

そういえば、通知を見るのを忘れていたな。

やっぱり、細川さんからの返信だったのか。

『サキュバスの素晴らしさは尻尾なり。あれに搾り尽されたいでござる。先日までそう思っていた小生だが、最近になってサキュバス尻尾に掘られる良さにも気づき始めて……わかつてくれるか、七草氏よ』

以前したサキュバス談話の続きらしい。

『サキュバスの尻尾はいいですね。クパアと開いて咥え込まれるのが最高です。その前にえげつない構造を見せつけられたり。でも、掘られるのはちょっと……』

まったく……彼との会話は癖になる。それに元気をもらえる。持つべきものは、好きなことを好きだけ話し合える友達だな。

『初めは誰だってそう言うんだけど、すぐにハマるはず。サキュバスにハマれるのに。ふふっ、小生渾身のギャグの切れ味はどうでござるか。とりあえず、オススメはこれとござる』
たしかに上手い……のかな。それはひとまず置いておいて、ご丁寧におススメ作品のURLを貼ってくれている。ここまでされると、クリックしないわけにはいかないだろう。

「……んう、なるほどなあ……」

作品説明だけでも、十分にエッチな雰囲気が伝わってくる。彼がオススメするだけはあるな。でも、男の娘サキュバスってなんだ。それはもう、インキュバスっていうべきなんじゃ。

つく——手が勝手に……。本能が新たな快楽を望んでいる。性欲に正直な奴め。今月はまだ何も買っていないし……。ちょっとぐらいいいかな。これで、今夜のオカズは決まったも同然だ。

『購入してみました。読むのが楽しみです。それと、音声作品で似たジャンルのオススメはありませんか』

そんなこんなで、瞬く間に時間は過ぎていき……。今は、ベッドの上で横になっている。

今日という日は、とても充実していた。半年も同じクラスだったけれど、まったく接する機会がなかった咲ノ宮瑠瀬という少女。彼女と話ただけでなく友達関係まで築き、一緒に下校した。あと、誘惑も受けて。

そして、サキュの宮さんということ、本人の口から告げられた。清楚を体現したような存在なのに、オスの情欲を惹起するものを描いていたなんて……。

エッチなイラストを描いている女の子を想像すると、どうしようもなく興奮してきて……って、そういうことを考えちゃダメだ。作家先生には、男性も女性も関係ない。そう教え

てもらったばかりじゃないか。

咲ノ宮さんとの会話で思い出したが、誤字を指摘されていたんだっただな。早く訂正しないと。

『小生はそこまで音声作品にハマってないでござるが……おしりエッチ中毒な男の娘サキユバスがオススメでござる。あと、サキユバスではないでござるが、女の子様のおもちゃ性活にもそういうトラックがあるから聴いてみるでござる』

お、変態がオススメを紹介してくれたぞ。ここでの変態は、軽蔑の意味ではなく、褒め言葉だからな。

それらの作品に目を通した後、彼にお礼を言うのであった。

リアルの友達ができて、家とかネットでの生活は変わらなくて……。

明日も、咲ノ宮さんと楽しく話せたらいいな。そう思いながら、眠りについた。

第二章 マイフレンドの甘美で苛烈な依頼

かつてないほど、学校に行きたい気持ちで満ち溢れている。初めてできた友達の顔を早く見たいし、会っていろいろ話したい。

早々に支度を終わらせ、意気揚々と歩き始める。一人なのは相変わずだが。

ギャルゲやライトノベルでは、玄関を開けるとヒロインが待っているのが鉄板だ。だがしかし、ここは現実——一緒に登校する女の子がいなければ、出会ったときから好感度マックスな異性もない。

僕のそばにいるのは、趣味を同じくした友達だけだ。

教室に着くと、今まで見向きもしなかった場所に視線をやる。そう、咲ノ宮さんの席に――

文学少女らしく、ゆったりと本を読んでいた。そういえば、昨日も読書に耽っていたよな。メガネ地味娘の読書姿ほど、素晴らしいものはない。そこだけ、三次元から乖離した世界、二次元のような美しさを放っている。ずっと見ても飽きない。いつまでも眺めておきたいものだ。

「ふふっ……」

こちらを向き、微笑んだ。極上の癒しが詰められた、天使の笑顔だった。その表情だけで、ご飯三杯はいけそう。

あいさつの意図を込めて手を振った。周りに人がいっぱいいるせいで、さすがに声をかけられなくて。

お返しにハンドサインを出してくれた。これが、友達との交流なのか。

そうして、充実した気持ちのまま、お昼休みを迎えた。

せっかくだから一緒に食べようと考えたが、肝心の咲ノ宮さんがどこにも見当たらない。彼女の席は、いかにもなギャルたちが占拠している。怖くて、どこに行ったのか聞けない。いつも通り、ぼっち飯でいいか。

一人での食事は、飢え死にしないための予防——ただの栄養摂取にしかない。二人以上だと、新たな価値も生まれてくるというのに。

仕方ない。早く昼食を済ませて、校内を散歩するか。お前の席ねえから。邪魔で机を合わせられないだろ、さっさとどっか行けよ。そんな眼差しを向けられているし。何もしていないのに、彼らからしたら僕は不快らしい。

さて、どこで暇を潰そうか。図書室で仮眠？ 個室トイレにこもる？ そうだな、ここは

自動販売機で飲み物でも買うか。中庭だったよな。

ガコンと音を立てながら、お目当ての飲料が吐き出される。子どもの頃からよく知っている甘さと、大人になって初めて体験する苦さが混ざったカフェラテだ。

その旨さを味わおうとしていたところ、ようやくあの人に会えた。

二人掛けのベンチに一人でちょこんと座り、またしても本を読んでいた。声をかけようか躊躇ったが、友達なんだし迷う必要はないだろう。

「おはよう、咲ノ宮さん」

こんな時間に「おはよう」はどうかと思うが、友達に「こんにちは」って言う方がおかしいだろ。

「ん？ あら、おはよう」

挨拶は基本。昔の書物にも、そう書かれている。

「もうご飯食べた？」

ごく自然に、隣に腰掛ける。我ながら大胆な行動だ。それでも、嫌な顔ひとつせず、受け入れてくれるからありがたい。

「ええ。これを——」

彼女にとっての昼食を出してくれた。飲むだけで朝のエネルギーチャージと印刷されたゼリー飲料だ。

若い内からそういうものに手を付けているなんて、信じられない。というか、今は昼だぞ。朝のエネルギーじゃ足りないだろ。

「もしかしていつもそれ？」

無言のまま首肯した。

「朝ご飯は？」

「食べてないわよ」

「ダメだよ！ しっかり食べなきゃ！ 栄養足りなくて倒れちゃう！」

過保護の親のような口調で、語気を強めて叱ってしまう。さすがにまずかったと反省し、すぐさま言い改める。

「お母さんはお弁当作ってくれないの？」

「母さんは忙しくて……」

「じゃあさ——」

「父はいないの」

いない——その言葉が、胸の奥深くまで突き刺さる。

良い感じで話そうとしていたのに、重い雰囲気になりがちがやられてしまう。

「そうじゃなくて、生まれる前に別れたみたいなの」

死んだわけではなく、離婚したらしい。

だったら、忙しい理由にも納得できる。働き手で、お弁当を作る時間さえ取れないのだろう。

そして、父親だった人に憤りを覚えてしまう。子を育てる義務を放棄するなんて、おかしいんじゃないか。

恵まれた家庭のせいで、ついつい同情してしまっ

「同情とかはいいいから。……すごく楽しいもの」

苦しい生活ではないようだ。幸せそうな表情で、強がりではないことはすぐにわかる。家族の違いから、勝手に差別していた自分が憎たらしい。

ただ、過去を思い出したのか、一瞬だけ陰りが見えた。その辛そうな顔が、脳裏に焼き付いて離れなくなる。

これ以上、嫌な気持ちを掘り起こさせてはいけない。家族について知る機会があるならば、自らの意志で話してくれるときだ。

「……………」

「……………」

ここで会話が途絶えてしまった。もうネタが浮かばない。こういうとき、いくらでも話せるリア充が羨ましくなる。

咲ノ宮さんは本に目を落としている。沈黙が悪いわけではないし、読書も悪いことではない。それでも、会話を優先したくなって……。

「その……何読んでるの？ よかったら教えてくれない？」

読書中の人が、十中八九受ける話を振ってしまう。残念なことに、この質問は不快にさせるおそれがある。

僕自身、クラスを牛耳っているボスから、同じことを言われた。本能的恐怖から誤魔化そうとしたけれど、あっけなく奪われ、きわどい格好をした女の子が表紙絵のライトノベルが晒された。彼が、その次に取った行動は、容易に想像できるものだった。

あのと

さっきの発言を訂正しようとしたところ。

『『ヤンデレ妹に四六時中愛される監禁性活』』

「え？」

「だから、『ヤンデレ妹に四六時中愛される監禁性活』よ」

表紙を隠す目的で覆われているブックカバーを外して、先ほどまで読んでいた本を見せてくれた。

可愛さと恐ろしさが混合した女の子が描かれていた。その瞳は色を失っていて、正気ではなさそう

特徴的な服装で、あからさまに男を誘うポーズをしている。よく考えなくても、性欲に火をつけるための服なのかもしれない。

余裕で大人向けの小説とわかるものだった。それをこんなところで読んでいたのか。おかた、昨日の放課後と今朝も、これを読んでいたのだろう。

文学少女ではなく、性文学少女だったとは。

「もしかして知らないの？ 最近発売されたばかりの新作なんだけど、タイトル通りの内容でね、兄が大好きでたまらない妹がいて、もう我慢できないってとうとう襲っちゃうの。勉強を教えてもらったお礼に、アイスティー出してあげるんだけど、それに睡眠薬が盛られててっていう感じで。初めは兄弟だからって拒んでいたんだけど、次第に溺れていって……。監禁という文字通り、手足を拘束したり、首輪をはめたり、監視カメラをつけたり、何もかも管理して、ほんとヤンデレなのよ。でもでも、ナイフを持って殺しちゃうようなヤンデレじゃないからね。それで、兄のことを兄さんって呼ぶの。ここ重要！ もう続きが気になって……。似たような展開を前書いていて、そのときは妊娠エンドだったから、今回はどうなるのか。やっぱり同じなのかそれとも……。終わったら貸してあげるわ。参考資料にもなると思うし」

唐突に始まる作品説明と、マシンガン並みの感想。挙句の果てに、後で貸してあげるとまですべてきた。

どうやら、特定の話題になると饒舌になる人だったらしい。またしても、共通点を見つけてしまう。

意外な姿に困惑と歓喜の両方が押し寄せているけれど、お礼だけはしなければ。さっきの質問は、趣味のあう友達だからこそ、答えてくれたに違いない。

「普段こういうの読んでるの？」

流れが掴めたら、ここぞとばかりに会話を広げていく。

「もちろんよ、特にこの作家先生は好きで。他にもヤンデレものをいくつか書いてて、ヤンデレならではの愛情表現が最高なのよ。その愛情にやられる瞬間が興奮もので、まあ、逆転があるのは商業だから仕方ないとはいえ……。それで、後日談が魅力なの。前なんか子どもを孕んでるように思わせる描写があってね……」

何かのスイッチが入ったみたいに、喋り続ける咲ノ宮さん。圧倒されてしまうが、どれだけこの作品を愛しているのが伝わってくる。

もっと聞いてみたいけど、場所が場所だ。

「その……気持ちはわかるけど……もうちょっと声下げようよ。周りが……」

オンになったスイッチをオフにしようと試みた。おかしな噂をされたら困る。

「あ——失礼したわ」

今の状況を理解してくれたのか、オタクから地味娘へと姿を変えた。

「そういえば、昨日細川さんと楽しそうな話してたじゃない」

「なんでそれを……」

「ごめんね。別に覗こうとしたわけじゃないの。二人の会話が流れてきて……」

フォローしている人同士のリプライは、タイムラインに表示されるんだったな。というこ

とは。

「咲ノ宮さんも細川さん知ってるの？」

「ええ、よく感想言ってくれるし、前のコミフェのときは差し入れ持ってきてくれて……」

「会ったことあるの！？　どんな人だった？　顔は？」

視線を外されて焦ったが、すぐに戻してくれた。なんだか校舎の方を向いていたような。

「そういうの良くないわよ。知ったところで何も得にならないし、本人も迷惑でしょ。そうね、あのときはほんと申し訳ないことしたわ。ごめんなさい」

「いや、もうあれはいいって。そのおかげで咲ノ宮さんと友達になれたんだし……」

「ありがとう。とにかく、どこ住みとか聞いちゃダメよ」

もったもなことがあった。リアルがわからなくても、十分すぎるほどコミュニケーションを取れているじゃないか。

ただの好奇心で中の人を探ろうとするのは、相手にとって迷惑極まりない。関係が悪化するどころか、繋がりを遮断——ブロックされることだってある。

「悪いことしちゃったなあ」

あれ？　昨日の会話？　それって、あの話じゃないか！

「リプライ見てたんだよね？」

「掘ってもらうのがどうこうってのよね？　それで、あの作品どうだったの？」

「そ、それは……よかった……」

俯きながら小声で伝える。新たな性的嗜好を見抜かれた気がしてならない。

「へえ……次、そういうの作ってみようかしら？」

「楽しみにしてる……」

「ふふっ、ありがとう」

こうして、僕たちのちょっと変わったお昼休みは終わりを告げる。

最後に、大量の勇気を消費して、明日から二人でお昼ご飯を食べようと約束した。あと、コンビニでおにぎりを買うだけでもいいから、ゼリー飲料だけはやめたと指摘しておいた。

下校時刻——今日は、遅くまで残る必要もない。教室を出ようとしたところ。

「その……一緒に帰らない？」

なんと、咲ノ宮さんから誘われた。

「ダメかしら？」

「そんなことない。すごく嬉しい」

「ありがとう。それと、ちょっと職員室に寄っていい？」

「いいけど……呼び出された？」

「私がそんな不良に見えるっていうの？　提出物よ」

「ああ、昨日書いたものね」

昨日の放課後、僕と考えた学級通信の下書き。それを提出するために、職員室まで足を運ぶ。

「行ってくる。待ってて……」

「もちろん。僕は……咲ノ宮さんの友達だからね」

用事があれば、しっかりと待っていてあげる。これが友達関係ってものだろう。

職員室前ということもあって、何もしてないのに、なんだか悪いことをしてしまった気分だ。目の前をたくさん先生の教師が通っていく。授業を受けたことがある教師がいれば、まったく接点がなく、名前も知らない教師もいる。

「こんなところでどうした？」

「え、あ……えっと、友達を待っていました……」

こんなところにいるんだ。声をかけられるに決まっている。予想していたとはいえ、いきなり話しかけられると、どうしてもつてしまう。相手があの男性教師なんだから、よけいに緊張する。

「そうか、友達は大切にしろよ」

意外な言葉に戸惑うが、いつもの流れで対処する。

「ありがとうございます」

そうして、何事もなかったかのように職員室に入ってしまった。

先ほどの彼は、僕たち三年次の主任を務めている太田先生だ。細身の体にメガネをかけていて、先生の中でもイケメンの部類だろう。ちなみに、現代文の担当で、授業内容が大変わかりやすい。

厳格な雰囲気ので、一部の学生からの評判はいまいちらしい。校則にうるさいわけでもないのに嫌われていると、不憫に思ってしまう。

彼曰く、粹から外れたとしても、本人が心から望んだ行動の場合はそれでいいらしい。後悔のないように、したいことをして生きろ。後ろめたさがあるんだったら、今すぐやめておけとも話していた。教師の言葉なんてすぐに忘れてしまうのに、なぜかこれだけは覚えてる。

授業がわかりやすく、僕たちのことをよく想っていて、自分の考えを貫いている。やはり、凄腕教師に違いない。

そんなこんなで数分後、咲ノ宮さんが戻ってきた。

「……ありがと、待っててくれて」

「いや、ぜんぜん待ってないよ。それよりどうだったの？」

「良かったって。これもキミのおかげね」

どうやら、学校が満足する内容になっていたようだ。

「もう帰る？」

「そうね。帰りましょ」

咲ノ宮さんとの下校も、今日で二度目だ。

言いたいことがあったのか、僕たちだけの世界になって、すぐに口を開いてくれた。

「また手伝ってほしいことがあるんだけど」

「えっと……どんなこと？」

友達のお願いだ。快く受け入れるに決まっている。

「それは……文字に残るものの方がいいだろうし、夜までにツブヤイターで伝えるわね」

「ここじゃ無理ってこと？ ……わかった。それじゃよろしく」

顔を合わせてじゃ難しいことはたくさんある。無理矢理聞き出す必要もない。サキュの宮さんが教えてくれるまで、楽しみにしておこう。

その後、適当な会話を繰り返していると、駅まで着いてしまう。初日より沈黙時間は短かった。

テストの話をしないで、お昼休みの続きを聞けばよかったなあと悔やんでしまう。そうしたら、もっと仲良くなれたはずなのに。

帰宅してしばらく経つと、サキュの宮さんからメッセージが届いた。

それは思ってもいなかったもので、体から緊張の汗が流れ、動悸で胸が苦しくなってくる。

『初芽七草様』

突然のメッセージ失礼いたします。

わたくし、同人サークル『サキュバスパレス』のサキュの宮です。

この度、初芽七草様にコミックフェスティバルで頒布する小説の執筆をお願いしたく、こちらのメッセージを送らせていただきました。

小説内容は、男性が負かされるサキュバスものの短編を三本。いつも投稿なさっているものと変わりはありません。その内の一本に、先日の『爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』に加筆収録したものを入れています。

全体の大まかな内容は、サキュバスとの出会いから始まり、責められる場面、そして後日談というかたちを理想としております。プレイ内容やキャラクターの特徴は、すべてお任せいたします。初芽七草様の小説はどれも素晴らしく、そのアイディアに期待しています。

期限は受けていただいてから二ヶ月で（リテイク込みとさせていただきます）、文字数は五万字を予定しております。できる限り、一本ごとの文字数が同じになるよう調整していただきます。

それに伴い、お渡しする金額は七万五千円とさせていただきます。

ご納品時は、テキストファイルでもワードでも構いません。製本作業は、わたくしがさせていただきます。

完成時に、電子と紙媒体どちらの完成品もお送りいたします。

本文の最後に、わたくしのメールアドレスを記載させていただきます。

納期や報酬、その他ご質問があれば、何なりとお申し付けください。

ご検討、どうぞよろしくお願いいたします。

サキュの宮』

これって……ご依頼？ サキュの宮さんが、コミフェ用のエッチな小説を書いてくださ
いって頼んできたのか？

しっかりと納期まで明記されているし、報酬が七万五千円だって！ 貯金額と大差ない
んだけど……。

どう返事をすればいいんだ。

悩みに悩んだ末、キーボードを打ち始める。

『やってみたいけど、お金はもらわなくてもいいよ』

『友達からお金をもらうのは悪いとか考えてない？ これはお仕事。タダでやらせると私
が悪者になるし。わかったらどうするか聞かせて。もちろん、私も手伝うから』

なんて愚かなことをしてしまったんだ。

「ごめん——」

届かないとわかっていても、謝らなければ気が済まなかった。

気持ちを切り替えて、咲ノ宮さんではなくサキュの宮さんへ送る文章を作成する。

『サキュの宮様

先日、フォローさせていただきました。初芽七草です。

この度は、わたくしにご依頼をくださいまして、ありがとうございます。

僭越ながら、サキュの宮様の作品制作にご協力させていただきます。

いくつか質問がございまして、書かせていただいたものに、サキュの宮様がイラストを付
けてくださるというかたちでよろしいでしょうか。

また、コミックフェスティバル限定でしょうか。DL販売の予定はありますか。

初芽七草』

やると決めたからには、責任を持って最後までやり遂げる。

サキュの宮さんが——いや、彼女と読者が、満足できるものを書きたい。

信頼を裏切ることだけは、絶対にしないと心に誓う。

『初芽七草様

お返事とご承諾ありがとうございます。

それでは、ご質問に答えさせていただきます。

まず、仰る通りで、初芽七草様がお書きになった小説に、わたくしがイラストを付けさせ
ていただきます。

つきましては、『爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』のキャラクターイメージを教えてくださいませんか。また、こういうイラストが良いという要望を仰っても構いません。誠心誠意描かせていただきます。

次に、後日DL販売も予定しております。

それでは、期限の二ヶ月後までに、ご納品お願いいたします。

制作する上で困ったことあれば、何なりとお申し付けください。

サキュの宮』

やはり、あのサキュの宮さんが、僕のサキュバスをイラストに起こしてくれるようだ。夢のような展開に、身体全体がカアツと熱くなる。

参考にしてもらうために、頭の中に浮かんでいるキャラクター像を具体的に伝えなければ。もう一度読み返してみるか。

投稿サイトを開くと、一つの通知が――

『あなたの作品『爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』がR18男子に人気ランキング上位に入りました！ ぜひご確認ください』

「おお……！」

ランキング自体は何度かあるが、こんなに高い順位を叩き出したのは初めてだった。

読者全員への大きな感謝とささやかな自慢を込めて、ランキング結果を呟く。

嬉しいことに、細川さんとサキュの宮さんが反応してくれた。特に、サキュの宮さんには感謝している。この結果は、彼女のおかげと言っても過言ではないのだから。

マイサキュバスのイメージが固まってくると、慣れない仕事用のメールで連絡する。

どんなものが出来上がるのか非常に楽しみだ。サキュの宮さんが描くサキュバスを想像しながら、今日を終わりに……眠れるわけないだろ。

パソコンに向かい、どんな小説にしようか考えを練っていく。

圧倒的な速度で時間が過ぎていき、いつもの睡眠時間を余裕で越えてしまう。学校があることも忘れ、夜遅くまでキーボードを打ち続けて……。

「はあ……ふわあああ……」

お昼休みになっても、眠気が抜けずにいる。油断したら、すぐにあくびが出てしまうほどだ。

「大丈夫？ 朝からずっとそんな調子だけど？」

僕の体調を気遣ってくれる咲ノ宮さん。ありがたいけれど、原因は彼女にあるんだよな。

正確には、夜中まで書いていた自分のせいだけど。

「昨日遅くまで起きてて……」

「もしかして、あれやってたの？」

「うん……」

「やっぱり迷惑だった？ どうしてもキミにしてほしくて……」

どことなく申し訳なさそうな言い方だった。

「そんなことないよ。とっても嬉しかったし」

「ありがと。期待してるから。……それじゃあ、ご飯にしましょ」

「ん。わかった」

母が朝早くから作ってくれたお弁当を机に置く。

咲ノ宮さんの昼食は、昨日までのゼリー飲料ではなかった。コンビニで売られているおにぎり——ツナマヨ、梅干しとラベルが貼られたものだ。

「それ、好きなの？」

「どうなのかしら？ 安かったから買っただけよ」

「そうなんだ」

たしかに、一部の具材は手頃な価格になっている。ツナマヨや梅干し。あと、おかかも。値段が決めての人もいるはずだ。

そうして、二人一緒に食べ始めた。

「……………」

「……………」

いつもとは違う、夢にまで見た友達とのランチタイム。その高揚感はすさまじいもので……いやいや、会話が途絶えていてはダメだ。無言で過ごすなんて寂しすぎる。何か良さそうなネタを……そうだ！

「僕のあげるよ。好きなの選んで」

お弁当の交換を実施してみる。相手がおにぎりのせいで、一方的にあげる感じになっているが、似ている行為ができるだけで満足だ。

これを通して、もっと仲良くなれば——

「遠慮しておくわ。あ、嫌なわけじゃないから。これでお腹いっぱいになりそうで……ごめんなさい」

そう言われても——

「お願いだから、これ食べてみてよ。すっごく美味しいからさ。お母さんの作ったのは最高なんだって」

きんぴらごぼうを指しながら、自分の意見を強く主張する。

定番のたこさんウインナーや玉子焼き、唐揚げ、一風変わったほうれん草のおひたしなども詰め込まれているが、一番好きなのがこれなのだ。咲ノ宮さんにも、ぜひこの味を知ってもらいたい。

「う、うーん……ちょっと箸借りるわね」

「え!？」

奪い取った箸で、咲ノ宮さんがおかずを口にする――
瞬く間に顔が朱に染まる。これは間接キスなんじゃ。体の熱で理性が溶け、穴が開くほど唇を見つめてしまう。

「うん! おいしい!」

素直な感想さえも、今の僕には届かない。

「ありがと。ん? 赤くなってるわよ。何かあった?」

間接キスに気づいていないのか、なんでそうなったのか尋ねてくる。何かあったじゃない。されたんだよ。

「どうして僕のを……」

「持ってきてないもの。借りないと、食べられないでしょ」

彼女の昼食はおにぎり。箸は必要ないし、持ってきてすらいらない。

きんぴらごぼうを食べるには、箸を使わないといけない。

だから、借りることにした。そんなの、考えたらすぐにわかることじゃないか。

「ああ、そういう……さっきの間接キスだって言いたいわけね」

先ほどの行為をようやく理解してくれた。だが、僕と違って平常心を保ったままだ。

気持ちを見抜かれてよけいに恥ずかしくなってしまうが、首を縦に振る。

「私は別に構わないけど、キミはそういうのダメな人? そうだったら、ごめんな……」

謝ろうとしていたところに口を挟む。

「大丈夫、大丈夫だから」

僕はただ、女の子と間接的にキスしてしまったことにドキドキしてただけ。そうだ、友達であると共に、女の子でもあるんだ。友達意識が強まれば強まるほど、そのことを忘れてしまう。

異性という事実が身に染みると、胸にちくりとした痛みが走った。だが、それも一瞬。特に気にするものでもなかった。

今日も、一緒に帰ろうと誘ってくれた。

これからこういう日が続くと思うと、幸せすぎて天に昇ってしまいそうになる。

「……ねえ? なんだかぼーっとしてるけど……聞してる?」

「え!? ごめん。えっと……なに?」

「はあ……昨日の話で……」

昨日起きた出来事がたくさんありすぎて、どれがどれだかわからない。咲ノ宮さんの食生活が悲惨で、父親がいないと知ったことかな。ご依頼だろうか。ランキングだったり……。

考え込んだ結果、お金はいらなかったことだと勝手に判断した。

「そ、そうだよね。ごめん……」

あの発言で彼女を不快にさせてしまい、自分自身も情けなく感じた。謝罪の言葉が漏れるのは当然だ。

「なんで急に謝るの？」

「その……お金のことかなって……」

「ああ、あれね。わかってくれたのなら、それでいいわよ。いらないって言われたときは、さすがに困ったけど……。働かすだけ働かして、給料あげない悪い店長さんになっちゃうでしょ」

その具体例で、どれほど酷いあやまちだったのか改めて痛感した。無給で働くと言言していたようなものだったとは。

「この話はおしまいにして……よいしょっと……」

カバンから、カバーで覆われた本が取り出された。おそらく、昨日の昼休みに読んでいたものだろう。『ヤンデレ妹に四六時中愛される監禁性活』っていうタイトルだったかな。

繋がった——会話の流れを理解できた。

「これ、貸してあげる。とても面白かったから、絶対気に入るはずよ」

オタクモードのときの約束は、嘘じゃなかったらしい。

エッチな小説を借りるというおかしなシチュエーションから、友達がいることの良さを実感する。

「読み終わったら、ツブヤイターに感想書いてあげて」

「えっと……それは？」

「作品名やペンネームで検索したときに感想があれば、嬉しくなるでしょ」

「……そうだね」

エゴサーチと呼ばれるものの説明をしてくれた。この行為は、悪評があって落ち込むこともあるそうだが、基本的には興味を示している眩きで、作品制作の原動力にもなるらしい。

「私は何回かあるけど、もしかしてやったことない？」

「あるけど……自分のしかなかった」

僕のような人がやっても、まったく意味がない。それどころか、知ってすらいらないのかな、無関心なんだとマイナス効果になってしまう。

「まあ、初めは誰だってそんなものよ。それより、書いてて困ったことある？」

話は、依頼でもある小説執筆に変わる。

「ない……かな？」

「本当？ 教えてくれないと私も困るから。ほら、言ってみて」

「……ごめん。その……どうなのがいいのかわからないままで」

今までは好きなように書いていたけれど、頼まれてしまったからには、それじゃいけない気がする。流行に合わせるべきじゃ。そう考えてしまっって、全然進まなかった。

「そうねえ……シチュエーションに正解なんてないと思うの。そんなものがあったら、全員

同じになっちゃうでしょ。好きなものでいいの——私だってそうしてるから」

「う、うん……わかった」

パイズリ好きな作家先生は、パイズリばかり。本番嫌いのせいで、本番を書かない作家先生だっている。サキュの宮さんも、好きなものを描いているらしい。やっぱり、そうするのが一番なのかな。

「これで終わり？ 何でもいいのよ。キミの力になりたいし」

「じゃ、じゃあ……。でも、これはちょっとまずいかな……」

「いいって言うてるでしょ」

「その……なんで僕だったの？」

有名な人に依頼した方が、エロい内容になるに決まっている。人気もあるからたくさん売れるはずだ。

「知りたい？」

「知りたい……です」

「キミもいるんじゃない？ あまり認知されていないけど、応援している大好きな作家先生が……そういうことよ。でもね、本当の理由は、一緒に作品を創ってみたかったからなの。私たちって同い年だし、やってることも似てるでしょ。だからこそ、二人で何かをやったら楽しそうだって。それに、この機会にもっと仲良くなれたら……」

どうしてか、後半になるにつれ声量が小さくなっていく。心なしか、顔も朱く染まっている。その様子を見てみると、また胸がズキズキと痛くなってきた……。

それからというものの、会話は一切起きなかった。

帰宅後、すぐにパソコンに向かい、執筆作業に入る。暇なときに軽い気持ちでやるのではなく、期日までに仕事を終わらせるという覚悟を持って。

ある程度時間が経ってから、ふと時計を確認する。もうこんな時間か。

「……ふう」

憩いの場であるツブヤイターを開くと、ダイレクトメッセージが届いていた。それを読もうとしたけれど、一階から僕を呼ぶ声が聞こえてくる。

仕方ない。先にご飯を食べようか。切なさが残る状態で、階段を下りていく。

いつもならば、夕食の後にリビングでぐったりしている。しかし、今日はすぐに自室に戻った。もちろん、知らせが気になっていたからだ。

通知を見る——案の定、サキュの宮さんからだった。

『初芽七草様』

先日、メッセージを送らせていただいたサキュの宮です。

『爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』のラフが完成いたしました。

ご確認、よろしくお願いいたします。

こちらでよろしければ、完成に向けて取り組ませていただきます。

それでは、初芽七草様の作品を楽しみにしております。

サキュの宮』

一枚のイラストが添えられていた。それは、先日投稿した小説のキャラクター——スク水爆乳ロリサキュバスだった。今回のコミフェで、頒布予定のものでもある。

「すごッ——！」

未完成でもすさまじい破壊力で、思わず感嘆の声が漏れ出る。爆乳を強調させる構図が、痛いほど股間に響く。しかも、爆乳とその持ち主の体型が不釣り合いで、よけいに胸の大きさを意識してしまう。このおっぱいには絶対に勝てない。パイズリされたい欲望が、一瞬で限界を迎える。

これならば、理想とする——否、それ以上のサキュバスになるに違いない。

迷うことなく承諾した。それから、他のイラストはサキュの宮さんの独断で書いてくださいとも伝えておいた。彼女の絵は、確実にストライクゾーンに入ってくるんだから、何も問題はない。

メッセージを送ってから、ずっと眺めていた。愛娘のアルバムを見るようにしながらも、クラスで一番性的な子を盗撮するような感じで。

イラストを脳内に保存してから、僕の小説を読んでもみると、エロさが一気に増し、イラストの力ってスゲーと思いついた。

これからもサキュの宮さんのめっちゃシコなイラストが付くとなると、楽しみ過ぎて体中の血液が沸き上がる。

そういえば、どんな状態で描いているんだろう。もしかして、淫らな方向に気持ちが昂っていたり、女性の反応が完全に表れていたりするのかな。

軽く妄想してから、この感情は歪んだものだど気付く。こういうことは絶対に考えちゃいけない。作家先生に性別の差なんて関係ない、そう言われただろ。

女性作家先生の作品を性的に見るのは構わないし、本人も喜ぶことだろうけど、先生自身に欲情するのはいけない。そのことを深く心に刻みつ、再度パソコンに向かう。

それから、さらに時間は流れ……。

「今日はこれぐらいでいいか」

昨日の反省を踏まえ、やりすぎを防ぐ。もう少し書きたくても自粛する。

「……んじゃあ」

高価な宝石を扱うような動きで、カバンから一冊の本を取り出す。そう、咲ノ宮さんに貸してもらったエッチな小説だ。

初めて友達から本を借りて、エロラノベ童貞を卒業する。二重の意味で緊張してしまう。読み進めると、男女の営みを表した話が見られて、きわどさを通り越した挿絵もあった。

「うわああ……」

この声は、嫌悪ではなく興味や関心ということを自覚している。

文字を追うのがやめられない。ページをめくる手が止まらない。物語から離れることができない。

室内は、パラパラと紙をめくる音と、自分自身のいやらしい吐息が漏れるだけとなっている。

あつという間に一章が終わり、これからどうなっていくのかという期待が膨れ上がる。言わずもがな、体も完全に期待しきっている。

次いで二章、三章……とうとう我慢できなくなり、好みのシーンを読み返す。汚さないように注意しながら。

いつの間にか、ラストまで行っていた。

全体的にエロかったけど、出すならこっちが発動したら、萎えてしまうんだよなあ。最後のエッチシーンでなら、逆に興奮するけど。

「そういえば……」

一旦本を置き、パソコンの前に座る。

感想を呟いておけば、作者のためになる。咲ノ宮さんから教えられた言葉だ。特にここが良かったと、百四十文字いっぱい使って表現する。

他のオススメも読んでみたいなあと思っていたところで――

「これって咲ノ宮さんも読んでいたんだよね？　これで……その……エッチな気分になったってこと？」

僕しかない部屋で、ここにはいない彼女に質問する。当然答えは返ってこない。だが、あんなに絶賛していたんだ。この作品で愉しんでいたはず。そうなると、彼女のそういう姿を脳内に浮かべてしまつて……。

「う、う……」

またしても気持ちを抑えきれなくなってしまう。

先ほどと違い、サキユの宮さんではなく、咲ノ宮さんでの妄想だ。女性の作家先生ではなく、一人の女の子をネタにしている。

好きな子の性欲に溺れた姿を想像することは、女に飢えた思春期男子にとって日常茶飯事。罪悪感を覚えてしまうが、人間の本能には逆らえない。

あれ？　僕は――咲ノ宮さんを好きだと思っている？

友達としてではなく、恋人として見ている？

友達の行為ではなく、恋人の行為を望んでいる？

咲ノ宮さんのことを考えれば、得体のしれない温かいものが胸の奥から生まれてきて……。次第に呼吸が苦しくなり、頭もどうにかかなりそうだった。

現状を理解できず、モヤモヤした気持ちのまま、ベッドに身をゆだねることにした。

ちょうど日付が変わったばかり。普段の睡眠時刻だ。明日は体育の授業だし、今日みたい

にあくびが止まらないなんてことは避けたい。

早い内に寝ようとしても、思考が咲ノ宮さんでいっぱいになっていて、なかなか寝付けない。

これから、友達として彼女と接することができるようか。

第三章 迷える少年少女は繋がる心を好む

中庭の方が落ち着くと言われたので、日影で涼しみながら昼食を食べていた。それが終わると、本題に……。

「昨日の本ありがとう」

「もう返すの？ そんなすぐじゃなくても……。もう少し使いたいでしょ？」

「つか……!？」

「もしかしてダメだった？ とってもいい話だと思ったのに……」

嘘を付いては、実用的な作品を目指して書いた作家先生に失礼だ。小さな声ながらも肯定する。

「それは……うん。使えた」

「ほんと！ どこが？ どこが気に入った？」

珍しく、周りには誰もいない。こういう話題になっても、目立つことはないはずだ。

「睡眠薬飲まれて、起きたら手足拘束されてたところ……」

下を向いて、ぼそぼそと答える。

「そこは私も好きよ。初めてのエッチシーンで、拘束されていて逃げられない。素直に妹の愛情を受けるしかないっていうところよね。兄弟だからと愛を拒む様子、嫌がっていても体が反応を示す瞬間、拘束具がギシギシ音を立てる描写、そういうところにすごく興奮して……」

僕と違い、恋愛小説の感想のように、すらすらと具体的な内容を口に出している。

「そういうの……恥ずかしいの？」

「ええ。だいたい、そういうことを考えなかったり隠してる方が、不健全だと思うのよ。料理が充実してるみたいに、性を題材にしたコンテンツがたくさんあって当然でしょ。欲求の一つで、私たちの原点なんだから。り、リアルのには慣れてないけど……」

「そんな考えもあるんだ」

淫らなことは不健全と豪語している人の方が歪んでいる。そういうことを言いたいのかな。

ただ、後半部分を聴き取れなかったのが心残り。聞き返して不快にさせたくないし、ここは会話を広げていこう。

「咲ノ宮さんは、ふつうのラノベは読まないの？ 僕はよく読んでるんだけど」

「んっと、参考にしようといういろいろ読んだんだけど、どうしても合わないところがあった……」

嫌いとか面白くないではなく、合わないと表現するところに好感を持てる。

価値観はそれぞれで、生きていくうえで拒絶反応を起こしてしまうものは必ずある。

僕の場合は、スポーツ業界の話や芸能ニュース、リア充が好きそうなテレビ番組だ。

成年漫画などのコンテンツを毛嫌いしている大人が、とても多いのも知っている。それはもう、親のかたきのような扱いをしているのだ。

排除しようとしたり憎んだりせず、咲ノ宮さんのように遠ざけるのが一番に違う。でも、どうして合わないんだろう？ この年でサブカルチャーに興味津々だと、ライトノベルを嗜んでいると思っていたんだけどなあ。萌えとエロが融合している貴重な小説だし。「最近のは、その……そういうシーンがよくあったりするし、期待してもいいんじゃないかな」

「なんていえばいいのかしら。胸を揉んだりパンツが見えたり、お風呂に一緒に入ったりするでしょ。そういうのが起こり続けても、慌てるだけで終わりなのよ。なんでそこで我慢できるの。枯れてるのになって。何かハプニングがあってもいいはずなのに……。仕方ないとわかってるんだけど、どうにもねえ……」。

あと、恋愛の行きつく先は、セックスでしょ。なのに告白で終わりって、ちょっと味気ないじゃない。最後までしてくれたら、本当に愛してるんだなってなるけど。

ほかに、ヒロインを選べなかったり、好意に気付かない主人公もいるでしょ。決死の告白をしても、聞き取れなかったみたいな展開とか。そういうところがちょっと苦手で……。それに、ヒロインもヒロインなのよ。出会ってすぐ好きになる人ばかりで、もうちょっと過程を書いてほしいなって。エロ漫画みたいな短い話だと、そういうところは端折るべきだけど、長い小説なんだからね。

それで、面白い作品があれば、教えてくれない？ 私が知らないだけで、すごいものがあるかもしれないし。いえ、絶対あるはずよ」

つつい聴き入ってしまう。なぜそれが合わないのか、しっかりと考察している。

理想としているラノベを探してあげたい。数えきれないほど多くのジャンルがあって、それぞれに強い作風がある。きっと、咲ノ宮さんのイメージを良い意味で裏切るものがあるはずだ。

ただ、驚いたことが一つ。ライフィイベントとして考えているからなのか、セックスという単語がすらっと出てきていた。

さきほどの言葉に従うならば、恋愛の到達点は性行為。一時の性衝動や肉欲なんかではなく、恋人を愛して子を宿すために生殖をする。

咲ノ宮さんとセックスする日が来るのだろうか――

突然胸が締め付けられるように痛み、体の芯から熱くなってくる。昨日と同じ苦しさだ。

「大丈夫？　なんだか辛そうだけど？」

「あ！？　ああ、えっと……僕たちもいつかそういうことするのかって……」

いくらなんでも酷すぎる。齒切れが悪かったが、事前の会話から何が言いたかったのか余裕でわかってしまう。

「ごめん！　今のなし！　忘れて！」

「……忘れない。そのね……私もちよつと気になってたんだ」

「――……！？」

「だから、その………し、してもいい……」

普段とまったく違う様子で、顔を真っ赤に染め、声まで震わせていた。

その声は、風の音でかき消えそうなほど小さくて……それでも、はっきりと耳まで届いた。言葉の意味を噛みしめると同時に、感じたことがないほど強い興奮に襲われる。心臓がおかしくなるぐらい、バクバクとした鼓動を奏でる。一瞬にして頭に血が上り、心も体も平常ではいられなくなる。

目の前にいる女性を、とても恋しく思う。その花唇は、並外れた妖艶さを持っていて。煌びやか黒髪に見惚れてしまい。丸まった背中を包んであげたい衝動に駆られ。彼女自身に触れて、女の子の温かさを味わいたくてたまらなくなる。

全身が熱病に冒されたように熱くなり、思考能力を一気に奪われ、もう咲ノ宮さんのことしか考えられない。それでも考えたらいけない気がして、わけがわからない状態にまで追い込まれる。

「……次の授業の予習やってなかった！　先帰る！」

「ちょ、ちよつと！　いきなりそんな……待ってよ」

その結果、ふざけた理由から逃げてしまった。そう、二人でいることに耐えられなくなり、この場から逃げ出したのだ。

引き留める声が聞こえても、決して振り返らない。

悲しさを帯びた予鈴が鳴り響いている中、一人になれる場所を目指して走る。

別に嫌いになったわけではない。それでも、彼女の傍にはいられなかった。

「今日も一緒に……」

「ごめん……また今度」

放課後になってもこの調子は続いていて、日常の一つにもなりつつあった咲ノ宮さんとの下校を断ってしまう。

本心では、下校時の会話を通して、もっと親しくなりたいと思っている。それなのに、二人きりになりたくない。

感情面も精神面も侵され、苦しいと脳が叫びまわっている。

教室を出るときに、咲ノ宮さんを一瞥する。人生に絶望したような表情だった。間違いない僕のせいだ。悔やんでも、もうどうすることもできない。

季節が巡るように、僕たちの関係も変わり始めているのかもしれない。

帰ってきてから今現在、ツブヤイターを使うことができずにいる。サキユの宮さんの眩きを見てしまうと、さらにおかしくなってしまうそう。

母が手間暇かけて作った夕食も、色が抜けた料理みたいで、味も何もなかった。

言葉にできないものが、胸の奥に住み着いている感じで、脳内が咲ノ宮さん一色になっている。

昨日はあれだけ頑張った、彼女からいただいた仕事にも熱が入らない。

頭から一人の女性が離れてくれず、眠ることさえできない。

もうどうしたら……誰かに聞いてもらうしかないのかな。覚悟を決めツブヤイターを開き、ダイレクトメッセージで連絡を取る。

『細川さん、夜遅くにすみません。突然ですが、男女間の友情って存在しますか。それとも下心だけでですか』

『あると思っているが、いつの間にか恋愛感情に変わっているものだろう。ずっとぼっちだったけど』

こんな時間にいきなり人生相談にしても、丁寧に答えてくれた。失礼だが、満足な結果にはならず、続けて質問する。

『それっていつですか』

『さあな。好きな子でオナニーでもしてみたらどうだ。終わってもまだ気になるなら好き。

冷めればそれだけの関係。みたいな考え方もあるんじゃないか』

『わかりました。ありがとうございます』

『これでも教師だ。相談にはいつでも乗る』

『ありがとうございます』

『それじゃあ次は、サキユバスと人間は一緒に生活できるかについての会議。小生はできると信じてるが、いきなりサキユバス本能が目覚めて枯れるギリギリまで搾られる日が来るはずなり。今度は七草氏の意見を……と言いたいところだが、今はその子のことだけを考えておけ。好きな人は大切にしろよ』

やはり、今抱えているものは恋心だろうか。それを確かめるには、恋人をネタにした自慰行為が有効らしい。

性欲の発散が終わっても、まだ咲ノ宮さんを求め続けていたら……。

複雑な感情のまま、彼女を想い始める。

「はあ……」

お昼休み、急にどこかに行っちゃって、下校も断られた。あれから一度も呟いていないみ

たいだし。

彼の顔を見たい。声を聴きたい。もっと一緒に過ごしたい。満たしてくれていたものが、ぽっかりと欠けてしまった気分だ。

いつものスイッチを入れられず、創作意欲もまったく湧かない。彼は、しっかり書いてくれているのかな。私みたいに止まっていたら……。

「どうしたらいいの？」

心の中を支配している気持ちだが、どんなものかなんとなく理解できる。経験したことはないけれど、今感じているのが恋——異性を好きになるということだろう。ただ、どう伝えればいいのか、それがわからない。

「……教えて」

本棚の漫画に手を伸ばす。それは、欲望の赴くままに男女が愛し合う物語だ。激しい行為から、どれだけ想いあっているのかが感じられる。

私は一体何を望んでいるのか。彼とどうしたいのか。脳内に刻まれている単語が、胸に突き刺さる。

その言葉を反芻していると、体が熱を持ち、自然と息が荒くなってしまう。それはまるで、夜な夜な一人で愉しんでいるときのように。

「教えて……母さん」

「何を教えてほしいって？ 風呂だったらもう沸いてるぞ？」

「ひゃああああ！ ノックぐらいしてって、いつも言ってるでしょ！」

ガチャリと戸を開けた母が、少し散らかった部屋に入ってくる。

普段ならば、足音や気配で気付くはずなのに……慣れない感情にやられていたせいだ。

「いやあ、ごめんごめん。うん？ なんか顔赤いけどどした？ うおッ、懐かしいなそれ。

ああ、邪魔だったか？」

「違う！ 違うから！ そうじゃなくて……」

エロ漫画を読んでいたら、エッチなことをしている最中だと受け取られても仕方がない。そうじゃない……とは断言できそうにない。性欲を抑えられなかったのは本当だ。ヒロインに自己投影して、夢想到に耽っていた。

「ほほう……さては、溜瀬も好きな人とそういうことしたいんだな？」

「そ！ そうじゃ……あう……」

「そんな反応されちゃあねえ……」

ここで動揺しては、肯定したも同然。彼をハメたときと同じじゃないか。それに、相手は私を何十年も見守ってくれた親。隠しごとを貫き通せるはずがない。

「どんな人かまでは聞かないさ。彼氏が出来たってだけで、あたしは嬉しいよ。けどなあ、最後まで添い遂げる気はある？」

最後——それは愛し合いながらの性行為。彼とならしてみたい。

「ある……恥ずかしいけど、してみたい……」

「もしかして、何か勘違いしてないか？」

「その……セ、セックスできるかどうかでしょ」

「やっぱりそう思ってたのか。そうじゃなくてだなあ……」

「そんな！？ セックスが恋愛の到達地点って、エロ漫画から学んだのに。」

「恋愛映画だと、告白の後キスでエンディング。エロ漫画だと、セックスで終わり。でもなあ、現実はずっと先があるんだよ」

「結婚……？」

エロ漫画で結婚描写はあまり描かれていないし、そのことをすっかり忘れていた。

「いいや、それも違う」

「じゃあ妊娠？」

『こんなに出されたら赤ちゃんできちゃう』とか『あなたがパパになるんですわ』みたいなセリフも少なからずある。

「もうちょっとだ」

「もしかして——！」

将来を誓った二人が、一つ屋根の下に住み、性行為を通して生まれた子を養っていくこと。つまり。

「……子育て」

「ん、そういうこと」

考えが浅かった。セックスして終わりなんて、体目当てでもいいところじゃないか。本当に好きならば、ずっと一緒にいるに決まっている。

「あたしは、最後の最後で失敗して……いや、あたしは覚悟決めてただけど、あいつと上手いかなかったんだよなあ……」

その言い方からして、父のせいってことなのかな。

「どうしてダメだったの？」

軽く唸りながら髪をかいて、質問に答えようか悩んでいる様子だった。

しばらく経った後——重くなった口を開いてくれた。禁断の話をすると決意したようだ。

「……そろそろいいか。瑠瀬、あたしがエロ漫画描いてるのは知ってるよな？」

「当たり前でしょ。でも、それと何の関係が？」

私の母は、商業でも活動している有名な作家先生で、エロゲの原画を担当したこともあるぐらいだ。

今までずっと育ててくれて感謝していると共に、創作の目標にもしている。

「エロ漫画家になって、二年ほどしたときだったかな、あいつと出会ったのは。まあ、そこからいろいろあって……長くなるからカットな。結婚して同居したとこまで飛ぶぞ」

「そこからが上手いかなかったの？」

自分の過去に繋がる話。当然のごとく、前のめりになって聴く。

「あたしがエロ漫画描いてるがバレちゃってな……。別に隠すつもりはなかったんだけど」

さあ。そんときに、『こんな気持ち悪いことしてるなんて知らなかった。好きになったのが間違い。こんなのクズがやることだろ。そんな子どもなんていらないし、どうせ子どもも気持ち悪くなる』みたいなこと言われてな。あたしに幻滅して、どこかに行ったってわけ。お腹の中の溜瀨を置いてな……」

「……………気持ち悪い……………クズがすることって……………」

エロ漫画を描くことに誇りを持っていて、子育てもおろそかにしていなかったのに、クズ呼ばわりするなんて。

どれだけ育児が大変でも、学校行事で忙しくなっても、しっかりと面倒を見てくれた。加えて、嫌み一つ口にせず、悩みを聞いてくれた。朝まで徹夜して、それからお弁当を作って、学校まで送ってくれたこともあるらしい。

仕事にはいつも全力で取り組んでいて、単行本が出版されたときや評価してもらったときは、すぐく嬉しそうにしていた。酷評され悲しんでいるときは、元氣付けあげたこともある。当然、締め切りは絶対に破らない。

大好きで尊敬している母。だからこそ、馬鹿にした人が憎たらしいし許せない。それがたとえ、血縁者だとしても。

「でもなあ、溜瀨も初めはそんなだったろ」

「あれは……………だって……………」

私が性に目覚めた時期に、母がエロ漫画家であることを告げられた。正直気持ち悪く感じていた。もちろん、今はそんなこと思っていない。思うわけがない。

「あんとき溜瀨にあたしの仕事を教えたのは、前と同じにならなかったからなんだ。黙ったまま生きるよりも、しっかり伝えた方がいいだろ。予想通り冷たい態度取られちゃって、悩んだんだけど……………わかってくれてよかったよ」

懊悩した結果なのか、自分の作品一つ一つについてじっくりと語ってくれた。

描いていて楽しかったことや困ったこと、やり終えてどのように成長したのか、読者の感想を聞かせてくれたり……………。そして、この仕事を始めようとした動機まで。

そのおかげで、なんとか受け入れられ、その仕事自体にも興味が湧いた。それが、サキユの宮として活動の原点でもある。

「で、何が言いたかったんだっけ？ ああ、趣味を理解してくれる男にしろってことだ。あと、付き合うんだったら、同人活動のことはしっかり話しておけよ。それで嫌われたら、それぐらいの奴だったってだけさ」

「サークルのことは、もう教えてるから大丈夫。彼もそういう人だね。初芽七草さんっていうペンネームで小説を投稿して……………」

「ほお、それは……………後で調べてみるとするか。それで、恋愛的な意味で好きなのか？」

「……………うん。でも、急に話してくれなくなっ……………一緒に帰ってもくれないし……………嫌われちゃったのかな？ 友達だったのに」

明らかに避けられている気がしてならなかった。下校を断られたときの悲しさが、今でも

忘れられずにいる。

個人情報尊重せずに、身バレするようにし向けたし。コミフェのために、執筆をお願いしちゃったし。嫌われる要素がいくつも浮かんでくる。

「ああ……つとね、たぶんだけど、恥ずかしいんじゃないか？ 恋愛対象として見始めるときは、誰だってそうなるもんだ。あたしだってそうだったし、瑠瀬を嫌ってるわけじゃないって。だからさ、そんな顔するな」

「そう……なの」

「たぶんな。この年頃は大体そういうもんさ」

恋人と意識してしまうから距離を取っている。そう考えることで、暗い世界から脱出できた。

もしそういう理由で避けているのならば、私に好意を抱いていることになって……。一人の女性として見てくれているということ……。――

「だからな、時期が来たら、また二人でいれるようになるからさ。今度は彼氏として」

「それっていつ？」

広がった距離を早く戻したい。一緒に下校して、お昼ご飯を食べて、たくさん話したい。

「さあな。いつかなんてもんはわからんよ。でもなあ、瑠瀬が告ればいいんじゃないか？ そしたら、そいつも決心が付くだろう？」

「わたしが！？」

「男がしないといけないって決まりもないし、いつかはするもんだろ。好きかどうかでお互い悩み続けるよりも、返事を聞く方がよっぽど楽だと思うぞ」

「……けど、どんな感じにすればいいの？」

ただ一言好きと口にするだけでも、相当な勇気が必要になってくる。

そして――告白後の空気がどうなるのか。もし振られでもしたら、関係はより悪化しそうだし、両想いならばエロ漫画のような展開にもなるかもしれない。

そんなことを考えて、恋愛経験のない弱い心が押しつぶされそうになる。

「他人事になるかもしれないけど、想ってること言えればいいだけだろ。そいつのことまったく知らないし、瑠瀬とどう過ごしてきたのかもわからないんだからさ」

彼と過ごしている内に生まれた感情。それを素直に伝えればいいだけ――

「うん……わかった」

「もう終わりか？ だったら、ぬるくなる前に風呂入っとけよ。あたしは原稿あるから戻るけど、何かあったら呼んでもいいぞ」

感謝しながら、部屋から出ていく様子を眺めていると……またすぐに入ってきた。

「そうそう、瑠瀬がそういうことするのは賛成だし、いつかはしてほしいと思ってた。でもなあ、する時期を間違えるなよ。あと、受かったって喜んでた学校に行かないって選択も必要になってくるだろうから。その辺は自分でもわかってるだろうけど……」

「……うん」

理解していることを言われると、少しばかり鬱陶しくなるが、それだけ心配してくれているということだ。苛立ちを覚えるわけがない。

「でも、同人は続けたい！」

新たな私を見つけ出せた同人活動だけは、絶対にやめたくない。

「やめろなんて言っただろ。したいことをしたいようにする、それが同人ってもんさ」

「……ん。そうだったね」

ガチャリと戸が閉められた後で、彼についてひとり想う。

初芽七草の名で小説を投稿している。聞き上手だけど、進んで話しかけてはこない。嫌な顔一つせず、学級通信の下書きを手伝ってくれた。それから……あれ？ 全然知らないような。

それでも、考えているだけで、体の芯から徐々に熱くなってきた……。

この想いを正直に伝えて、彼の気持ちを確かめなければ。

咲ノ宮さんに会いたいけれど、この感情が暴れ狂いそうで怖い。

登校するか欠席するかで迷っている。

葛藤が続いていると、すでにお昼を回っていた。昨日の僕の様子から、そっとしてくれていたようだ。

午後の授業だけだし、もう休んでもいいかな。いや、こんなじゃ駄目だ。いつまでもウジウジしているわけにはいかない。

逃げているだけでは、絶対に立ち直れない。ずっと苦しいままだ。だったら……布団から身を出し、準備を整える。

気分が重くなっても、途中で胸が詰まっても、学校を目指して足を動かす。

下駄箱を見ると、あのときとまったく同じ手紙が入っていた。偽名でもペンネームでもなく、本名で書かれていた——咲ノ宮瑠瀬と。

その名を目にした刹那、容姿が、声が、一緒に過ごした日々が、鮮明によりみがえってくる。一呼吸置いてから、本文を読んでいく。

『放課後、教室で待っていて。どうしても伝えたいことがあるの』

どうしても……一体何なんだろう。僕に嫌気がさし、絶交を申し出るのか。もしくは……悪い結果しか想像できない。

それでも、受け取ったからには、話を聞かなければならない。ここで逃げたら、本当の意

気地なしになってしまう。
勝負は放課後だ。

ついに、そのときがやってきた――

外から差し込む夕日で、二人しかいない室内は紅く染まり始めている。それはまるで、咲ノ宮さんと友達になったあの日のようだった。シチュエーションは同じでも、僕たちの関係は大きく異なっている。

どうしても伝えたいことって？ やっぱり避けていたことを謝るべき？ それとも、今の気持ちを正直に言うべきなのか？

頭の中に浮かんだたくさん疑問と迷いが、消えることなく膨張し続ける。

そんなときだった――

「手紙読んでくれた？」

「は、はひ！」

席を立ち、声がした方向に体を向ける。

誰よりも欲していたその姿に、胸が焼けそうなほど熱くなる。

おどおどした僕の瞳と違って、決心めたものが見えた。だからこそ、緊張や不安、恐怖、言葉にできないほど多くの感情に襲われ、おかしな返事になってしまったことが悔やまれる。

「もっと気を抜いて」

落ち着きのない僕を宥めるように、いつもの声色で話しかけてくれる。久々に耳にした声は、決壊寸前の状態を鎮めるのに十分だった。

「……わかった」

「それで……どうしても伝えたいことがあって、聞いてくれる？」

無言で頷く。

静謐な教室に、スウと女の子らしい呼吸音が響き……。

「友達をやめたいの！」

目の前が真っ暗になる。

圧倒的な辛さに心が潰れ、視界がにじむ。

咲ノ宮さんとの思い出が黒く塗りつぶされていく。

「嫌だ！ もっと咲ノ宮さんと一緒にいたい！ 避けていたのは、嫌いになったわけじゃなくて……その……隣にいたら頭がおかしくなりそうで……どうしようもなく恥ずかしくて……上手く言えないんだけど、とにかく嫌いじゃなくて……むしろ、その……す、好きで……別れるなんて嫌だ！」

「え！？ あ……そ、そうじゃなくて……」

感情に流されるまま口にした告白に、わたたと慌てている。

しかし、数秒も経つと、真剣なまなざしに戻り……ゆっくりと唇が動き始める。

「好き！ あなたのことが好きなの！ これからは友達をやめて、恋人としてやっていきたい！ でも、あなたのことは小説を書いていることと、好きな作品やシチュエーションがいしか知らなくて……。ずっとずっと一緒にいて、あなたのことをたくさん知りたいの。私と……私とつきあってください！」

語気を強めながら、一字一句丁寧に伝えられる。

その言葉一つ一つが、心の奥の奥まで強烈に浸透する。

友達をやめる。それは絶交ではなく、恋人になるという意味だったんだ。

咲ノ宮さんは覚悟を決めた。そうなれば、僕も決心するしかない。

言葉に内在されている霊力を吐き出すように、全力で告白に応じる。

「こちらこそ、お願いします！ 咲ノ宮さんのことは、絵を描けることぐらいしか知らなくて……。その……。一緒に過ごして、好きな食べ物とかどんな服を着てるとか、咲ノ宮さんのことをぜんぶ知りたい！」

「ありがとう……」

「それは僕が言いたかったことなんだ……。ありがとう」

「……これからは恋人として一緒にいてね」

「もちろん。咲ノ宮さんもいてくれる？」

「ずっといるわよ。それと、瑠瀬って呼んでほしいんだけど。私たち恋人同士でしょ」

「る、瑠瀬……」

名前で呼んだのは彼女が初めてだ。それはそれは、ものすごく緊張した。

友達になった場所で友達をやめ、僕たちは恋人になった。

そして、数秒……数十秒……。目と目があったまま、時間が過ぎていく。

教室内の空気はすっかり桃色に染まっている。

この後、エッチなコンテンツでよくある展開に移っていくのかな。夢にまで見たあの行為ができるんだろうか。

「あの……。ね。するのはもうちょっと待っててほしいの。それと、キ……。キスも我慢できなくなっちゃいそうだから……。うう……」

普段よりも可愛げのある声で、俯きながら告げてくる。

落胆を隠せない。確かに、告白してすぐにするのは現実っぽくないとはいえ、限界まで滾った気持ちをどこにやればいいんだ。

少しでもいいから、肉体的に接触したい。そう思うのは、男のわがままなのか。けれども、瑠瀬も我慢しているのは明白だ。

この想いは、来たるべき日まで封印しておこう。

「だから……」

恥ずかしそうに手を差し伸べてくれる。

「手をつないでほしくて……やったことなかったでしょ」

何の迷いもなく、宝石のように綺麗な手を握る。

初めて触れた女の子の手は、僕より何倍も柔らかく、握っているだけで心が満たされる。

「ありがとう……」

とびっきりの笑顔を見せてくれている最愛の彼女。

これからは、瑠瀬と素晴らしい日々を過ごしていきたい。

二人での下校。昨日していなかっただけで、随分久々に感じる。

今、隣には愛する人がいる。それだけで、天に昇るぐらい幸せだった。

「ねえ？」

「どうしたの？」

「その……電話番号の交換しない？」

そういえば、まだしていなかったな。一番知られなくなかった、ツブヤイターのアカウントはバレているというのに。

もちろんするに決まっている。なんとかのアプリのID交換だったら、インストールしてないせいで断るしかなかったけど。というか、僕と同じ立場の瑠瀬のことだ。そういうアプリは入れていないんじゃないかな。

「ちよっと待って、確認するから。えーと、どうやってみれば……ああ、これだこれ」

電話帳を開くのに手間取ってしまう。それもそのはず、親の番号を登録したとき以来、まったく使っていなかったのだから。しかも、スマホを買った当日の話だ。

瑠瀬に、電話番号が映った画面を見せる。

慣れているのか判別が付かない微妙な手つきで、その数字を入力し始めている。

しばらくすると着信音が流れ――

『私、サキュバス。今、あなたの後ろにいるの』

「は！？ え！？」

驚くのは当然だった。どうして、サキュバスが電話に……。

「うふふっ、何よ、その面白い反応は……。もっと遊びたくなっちゃうじゃない」

笑い声を聞いてすぐ、瑠瀬の悪戯だったと理解する。

おもちゃのような扱いを受け、馬鹿にされてしまう。悔しい。男として情けなさすぎる。けど、感じずにはいられない。

友達になったあの日も、嫌というほど弄ばれていたことを思い出す。手紙に、誘惑、電車内の通知とそれはもうたくさん。

ちよっとしたSとMの関係になっているが、これはお互いを信頼しているからこそ成せる業だ。

俺Sだから殴っても許せよとか、お前Mだから痛めつけられるの好きだろとか何馬鹿なこと言ってるんだ。あと、どっちって話を振られて、答えてすらいらないのに、憂さ晴らしのためにM認定して暴力ふるってんじゃないぞ。

「もう、ぼうとしてないで、さっきの番号登録して」

トラウマに支配されていたようだが、溜瀬のおかげでなんとか帰って来られた。

「う、うん。さっきしたから」

電話番号を登録し終わると、恋人としての距離が縮まった気がした。

「これで二人目。一人目は母さんで、次があなた」

「ふふっ……」

「へえ……ぼっちって嗤うんだ。どうやって後悔させてあげようかしら」

「違う違う。僕も家族しか入れてなくて、同じだなあって……。それに、親の次って知ったら嬉しくなって……」

豹変した溜瀬を鎮めようと、愛するからこそ生まれる気持ちを必死に伝えていく。

「そうなの。えへへ、一緒だね」

悪魔のような表情から一変、先ほどの天使の微笑みに戻る。どちらも最高とはいえ、日常を過ごすときはこちらの方がありがたい。いきなり変わると、すごく心臓に悪いし。悪魔状態は、桃色の世界だけにしてほしい。

それにしても、度々起こるこの豹変は、演技でやっているのか。それとも、天然なのか。そういうところを知るためにも、これから一緒にいたい。

初めて下校したときは、沈黙状態ばかりだった。だが、今は会話が途絶える気配がまったくない。

その途中に、新刊——僕が書く小説の話にもなり、進捗具合を尋ねられた。それなりにはできていると返事をしておいた。友達関係が崩れ始めたせいで、全然手を付けられなかったんだけど。それも今日まで。今夜から再会して、早い内に納品したい。

それに続き、他にどんな新刊があるのかと聞き返したが、秘密と可愛らしく口にして、すぐに話題をそらされた。サキユの宮さんのことだ。最高のものができあがるに違いない。

幸せな時間も終わりを迎え、私語厳禁の世界に乗り込んだ——

同じ服を着た人がたくさんいても、隣にはずつと溜瀬がいてくれた。それはまるで、くつついて離れない磁石のN極とS極のように思えた。

「夜、電話するから。……じゃあね」

降りる寸前、耳元で囁いてくれた。

感謝と喜びを伝えるため、スマイルを送りながら手を振ってあげる。

帰ってからの楽しみが、また一つ増えた。彼女の声を聴くためのスマホをぎゅっと握りしめながら、今日一日で得た最高級の幸福を噛みしめる。

時刻は夜更け。

パソコン横にスマホを置き、執筆作業に勤しんでいる。少し目を開けると、こんなものを書いていたのかと自分自身の文章に驚くと共に、修正点がいくつも見つかり情けなく感じてしまう。

そうこうしている内に、聞き慣れない音楽が流れだした――着信音だ。すぐさま、手元のスマホを取った。

恋人である咲ノ宮瑠瀬の名前が、画面に表示されていた。

本当に彼女なのか。どうやって会話を始めたらいいんだろう。初めてのせいで、躊躇ってしまう。

しかし、それもほんの数秒。勇気を振り絞り、電話に出る。

『もしもし』

「もしもし、さきの……瑠瀬」

『そう呼んでくれた方が嬉しいわ。それで、今どうしてる？』

何をしているのか気になって、電話をかけてみた。そういう意味だと捉えて、頬が緩んでしまう。これが初々しいカップルの行動かと思うと、なおさらだ。

「頼まれたのを書いて……」

『間に合うように完成させてね。期待してるから』

「わかってるって。期限中にできなそうだったらごめんだけど……」

『そのときは、私がなんとかするから安心して。で、なんだか息遣いが荒いようだけど、エッチなの書いて興奮した？』

「は！？　ち、違うって。そんなことないから」

執筆中に生理現象が起こっていたとはいえ、瑠瀬と話している今は落ち着いている。

必死に否定していると、くすくすという笑い声が聞こえてきた。もしかして、また遊ばれている？　表情がわからないせいで、もどかしい。

『一つ言っておくわ。あなた自身が使えるものを書きなさい。本人が使えないんだったら、読者も無理に決まってるでしょ』

正論だった。作り手が満足できなければ、受け手も満足できるはずがない。瑠瀬の教える胸に書いていこう。

ん？　となると、彼女も作品を世に出すときは、自分の描いたものでエッチなことをしているっていうのか？

「そ、それじゃあ……瑠瀬も描くときは……その……して……」

セクハラと頭ではわかっているのに、性欲旺盛な思春期特有の好奇心には勝てず、口が止まらない。

『……聞きたい？』

圧倒的な言葉の圧力。男を道具としか見ていない、いつものSモードで聞き返された。鋭い氷柱を刺されたような悪寒が全身に走って、酷く怯えてしまう。

「い、いえ、遠慮しておきます」

『そう、それは残念だわ』

興味が薄れて、飽き飽きしているようだった。どうやら、ヤンデレ気質のような天然ものではなく、性的に最強な女の子様キャラを演じているのだろう。

『それで、ここからが本題なんだけど……』

力のこもった言い方に、つつい身構えてしまう。

『あの……日曜日、で、デートしない？ 一緒に過ごしたいし、あなたのこともっと知りた
いし……ダメ、かな？』

デートだと！ カフェに行ったり、カラオケをするあのデートなのか！

「駄目じゃない。というか、してみたい」

『じゃあ十二時前でいい？ 待ち合わせは……学校近くの公園で。わかる？』

「うん、日曜のお昼にあの公園ね」

もう時代遅れなのか、そこで遊んでいる人を見たことがない。かくいう僕も、通り過ぎることはよくあるけれど、入ったことは一度もない。

そこから、時代の流れに取り残されたような、地味で目立たない印象を抱いている。そんな場所を選ぶなんて、瑠瀬らしいといふかなんというか。

「それと、お昼食べてきちゃダメだから」

「うん、一緒に食べよ」

初電話でデートをすることになった。

週末が今から楽しみすぎる。

でも、少しばかり心配だ。

まず、着られれば何でも良いと思っていた僕にとって、瑠瀬と過ごすのに最適な服を持ちあわせていない。とりあえず、今持っている服で、いい感じのものを探して……英語が書いてあるのは論外だろ。何書いているのかわからないし、おかしい意味の方が多いだろうし。派手な色よりも、黒にワンポイントぐらいがちょうどいいかな。悩みに悩んだ末、なんとか決め終えた。

もうひとつの不安は、デートプランの構築ができないことだ。カップルが訪れるべきリア充的なスポットなんて、無縁すぎて想像もつかない。こういうときこそ、偉大なるパソコン様のお力を借りればいいのか。デートオスメスポットで検索して、その結果を地元のマップと照らして……。

準備は整った……たぶん。後は、当日を待つだけだ。

おっと、肝心の小説に手を付けていなかった。

土曜日は執筆作業に捧げて、日曜日にデートを満喫するでしょう。

第四章 友達から始まる恋人生活

「やっちゃった！ 間に合わない！」

いつものように、二度寝三度寝と繰り返してしまった。僕は馬鹿か。溜瀬とのデートがあるのに、なんで普段と同じ時間に起きてるんだよ。

今の時刻は午前十一時。待ちあわせまで残り一時間もない。

服を事前に選んでいたことと、寝癖がほとんどなかったのが幸いして、支度はすぐに終わった。

ご飯はいらないと言添え、怖いものに追われている勢いで家から飛び出す。そこからは猛ダッシュ。

乱れた呼吸を電車に乗っている間に整えて、ようやく目的の場所――公園前に着いた。スマホを点けると、まだ十二時になっていなかった。なんとか遅れずに済んだ。ギリギリだけ。

廃れた公園のベンチで、読書タイムを満喫している少女が一人。

彼女は、紺のブレザーを羽織っており、そこから焦げ茶色のブラウスを覗かせている。下もブレザーと合わせた紺のスカートだ。そして、足下には暗い色の手提げカバンが置かれている。

私服のはずだが、どこことなく学生服のようで、個性を極限にまで薄めた地味な雰囲気だった。だが、溜瀬の特徴を考えるとこの服装が最適だろう。

今の光景をイラストにすると、相当なものができあがるに違いない。そう思わせるほど素晴らしい選択だ。

もっと眺めていたいが、それではデートが始められない。

「ごめん、待った？」

「え！？ あ、ああ。別に待ってないわよ」

言う内容が男女逆に感じるけれど、別次元の美しさを見られたし、どうでもいいか。

「それで……どこに行きたい？」

「んじゃあ……」

綿密に練ったデートプランを発揮しようとしたところ、空腹を示す音が鳴り響いた。情けないことに、僕のお腹からだ。

「ふふっ、まずはお昼ご飯かしら？」

口元に手を当てたまま、笑われてしまう。言葉じゃなく、体で伝えてしまうなんて。

「……うん。お腹空いたし」

恥ずかしさに耐え、昼食に誘う。

「ちなみに、さっき何読んでたの？」

脈絡のない会話になるけど、どうしても気になっていた。信頼しているからか、嫌がるそ

ぶりをまったく見せずに答えてくれる。

「これよ」

ブックカバーの下には、きわどい服装をした爆乳の女性が数人描かれていた。彼女たちは皆、角と羽を生やしている。そして、『家畜勇者はサキュバスハーレムで眠りにつく』という文字も目に入る。

やはり、エロに趣をおいた小説を読んでいたようだ。

「それってどんな？」

やってしまった……。

「この作家先生は新人さんで、期待を込めて買って見たんだけど、すっごく面白くてね。ちよっと調べてみたら、ネットに投稿してたみたいんだけど……。特に、一人一人の属性がしっかりと出ているのが良くて。誰が読んでも、絶対に好みの娘が見つかるんじゃないかってほどこにね。とは言っても、イラストの力も大きいと思うけど。まあまあ、それは置いて、私はこの娘！ 大人の余裕たっぷりなサキュバスが好きなの！」

ただ、複数ヒロインのせいで、一人ワンシーンなのが残念で……。それもセックスばかりでねえ……。一応複数プレイがあるけれど、どれも内容が同じで。次回作で補完するか、ネット投稿者というところを生かして、番外編みたいなのをあげたりしてほしいなって。

でね、この作品の特徴はね、男に淫紋を刻むシーンがあるところなの！ どう、すごいでしょ！ 商業でこれを見れるなんて……はあ……よかったわ」

そう、溜瀬はこういう人だったんだ。

ほどよい感じに、会話を受け流さなければ。興味があるのは確かだけど、これ以上のめり込ませてしまうと、ご飯を食べるのが遅くなってしまう。

「タイトルだけでも良さそうだし、気になるのもわかるよ」

「やっぱりあなたもそう思う？ 実はタイトル買いしちゃって……。やっぱりタイトルって重要よね。一番初めに目にする文字だし。悪い言い方になりそうだけど、タイトル釣りもできるし……」

「ごめんけど……その話は後でいい？」

「あっ！ こちらこそごめんなさい。少し熱くなり過ぎたわ。もうペコペコでしょ？」

「うん。さっきまで寝てたせいで、朝ご飯食べる暇がなくて……」

「ふふっ、お寝坊さんのね」

とうとう待ちに待ったデートが始まる！

まずは、腹ごしらえからだ。

結局、どこにでもあるMマークのお店で、昼食を取るようになった。

ネットで探したとおきのカフェを提案したんだけどなあ。これじゃあ、リア充らしいデートにならないんじゃないか。

変わらない店内だが、隣に瑠瀬がいるおかげか、まったく違う雰囲気になっている。もしかしたら、普段の何倍も美味しく感じるのかな。

「あの……これとこれ……あと、これで……」

新商品セットと単品ハンバーガー、そしてナゲットを頼む。こんな注文の仕方だと、なんだか申し訳なくなるのだが、あんなに長い商品名を言えるわけない。

「一つじゃないの？」

「う、うん……お腹空いてたし」

「さすが男の人ね」

こんなところで感心されても、恥ずかしいだけだが、悪い気はしない。

「そうね……このチーズバーガーセットをお願いするわ。ジュースはオレンジで」

残すは会計だけ。ネットで得たデートマニュアルに従えば、全部出した方がいいんだよな。

「ちよっと待って。私のは自分で払うから」

「でも……」

「いいの。いいの。支払いぐらい共有しないと、幸せも共有できないでしょ」

「そう……わかった。」

店員さんから、そして背後からも、リア充爆発しろという視線を送られ、撃沈しそうになってしまう。

向かい合わせになるように座り、同じタイミングで食べ始めた。

予想通り、超がつくほどの絶品で、一人にいるときは絶対に感じられない味だった。恋人がいる効果を実感する。

瑠瀬との初の外食は、とても充実したもので、あつという間にお腹も心も満たされた。

「それじゃあさ、次カラオケ行く？ それとも映画？ 今流行りの恋愛映画あるでしょ。それ観ようかなって」

「別にいいけど……」

「どうしたの？ ボウリングとかやってみたい？」

「不快にさせたらごめんなさい。その……それって本当にしたいこと？ あなたが好きなことでもいいのよ」

その言葉で、デートという行為に浮かれすぎていたことに気がついた。カラオケや恋愛映画、ボウリングなんて、僕自身まったく望んでいない。

やりたくないことを無理にやっても、楽しめないに決まっている。僕だけでなく、瑠瀬も満足できないはずだ。

ここからは、素の自分を出していこう。

「……瑠瀬はどこに行きたいところある？」

「誘ったの私なんだけど、特にないの。一緒にいたただけだし……」

そう言われると、どうしても照れを隠せない。

「あ、書店がいい。ちょうど新刊出てたはずだし」

「だったら、次本屋さん？」

「お願いするわ。それで、あなたはどこがいい？」

「僕は別にいいよ。というか、久々に本屋さんに行ってみたいし」

「あまり行かないのかしら？ よくラノベ買ってるみたいだけど……」

「いつもプロゾンだからね」

プロゾンは、本からゲーム、食品、その他なんでも揃っているネット通販だ。検索するだけで目当てのものを探せるし、品切れもほとんどない。とにかく便利過ぎる。

「あら、そういうの使いすぎると、店の人が困るんじゃないの？ 売れない、消化できないって……」

その通りだった。通販のおかげで、書店まで足を運ばなくてもよくなったではない。通販のせいで、書店に行く機会がなくなった。こう表現すべきだった。

「店もいいわよ。店舗特典とかいろいろあるし、独自のポップもある。何よりも、実際に本が置かれてる光景を見られるんだから。もちろん通販も良いわよ。いろんなものが、どんなときでも頼めるのが強みよね」

「次からは、できるだけお店にしようかな。……んじゃ、今から本屋さんに……えっと、どこにあるの」

「すぐ近く。こっちよ」

このあたりの書店なんて知らないんだけど。不審に思いながらも、とにかくついていくことにする。

かれこれ十分近くは歩いている。なにがすぐだよ。

髪がべっとり張り付いて、汗もたらたら垂れてくる。夏の日差しが、鬱陶しいことこの上ない。

「大丈夫？」

「ええ、平気だけど？」

運動が苦手そうなのに、息一つ乱れていない。こんなに体力あったんだ。いや、僕が弱過ぎるだけかもしれない。うん、きっとそうだ。

「そんなこと言うってことは、休みたいの？ なんだか疲れてるみたいだし」

「……いや、まだ大丈夫だから」

「ほら、無理しないの。そのコンビニでアイスでも買いましよ」

強がりだとバレていたようで、休憩を促される。気遣いに甘えたくなくなってしまったが。

「いいよ、まだまだ元気だし……」

体力面で女の子に負けたくないという理由から、誘いを拒んでしまう。

「なら頑張ってね。ここを曲がればすぐだから。中は涼しいし、ここよりはマシかしら」
いかにも怪しい道を進んでいく。信頼しているから、後ろをついていつているが、危険な
においしかしい。

「ここよ。私が行きたかったのは――」

本当にここであっているのだろうか。多種多様の漫画や小説、CDやDVDまで置いてい
るところを想像していたのだけど、これではまるで……。

溜瀬は、一切躊躇わずに入っていく。対する僕は、恥ずかしさを覚えながら入店する。

「うわぁ……」

ドアをくぐってすぐ目に付く、肌色成分が多い女性のイラスト。やっぱり、成年指定の本
ばかり扱っている店じゃないか。

「こういう店初めてだった？」

無言のまま首を縦に振る。

「商業の作家先生はもちろん、同人誌の販売もしてるから、見て回るのはいい経験になるん
じゃない？」

「……そうなんだ」

普通の書店にはない同人誌には興味があるし、大々的に紹介されているトロ顔をした女
の子の漫画にも惹かれてしまう。このイラスト見覚えがあるんだよなあ。そう思い手に取っ
てみると、香子(きょうこ)先生が描いたものだった。

「それって？」

「あ!？ えっと……う、うん。前から好きで……」

エロ漫画に詳しくない僕でも読んだことがある、有名な作家先生だ。性愛をメインに、強
姦ものや男性受け、ときには女性同士、それはもう多岐にわたるジャンルで活動している。
同人活動もやっていて、今回のコミフェにもサークルとして参加すると呟いていたような。
雑誌インタビューで子持ちの女性と知って、大変驚いた記憶がある。

「……ありがとう」

「ん？ ど、どうも……」

嬉しそうにしている理由がわからないけど、とりあえずお礼を言うておく。

「買ってみれば？ 八回目の単行本で、面白さ……実用性は私が保証するわ。DL販売は遅
れるようだし」

「考えてみる」

「変なこと聞かかもしれないけど、電子の方が使いやすいの？ それとも書籍？」

「えっと……どうだろ？ 書籍が良いっていえば、嘘にはなるかもしれないんだけど……。
そんなことより、もっと見て回ろ」

ぴったりとくっついてくるせいで、嬉しいのやら恥ずかしいのやらおかしい気持ちにな
ってしまう。普通だったら幸せだけど、今は出来るだけ避けてほしいんだよな。

エッチなものが置いてある店だと、客層も限られてくるわけで、そんな場にカップルでい

ると落ち着かない。実際、憎しみのこもった眼差しを向けられているし。それでも、瑠瀬は何も感じていないようで、エロ漫画の山に夢中になっている。

「……これよ！　これ！」

いきなり一冊の薄い本を手にとって、嬉々とした声をあげる。その様子は、砂漠の中から砂金を探し当てたかのようなだった。

「それは？」

興味が湧くのは当然で、宝物のように握りしめているものに注目する。

表紙には、頭まですっぽり覆い隠すマントを羽織った女性が描かれてた。怪しさを醸し出す服装をしているが、自己主張が激しすぎるわがままな胸のせいで、妖しさも十分すぎるほど放っている。

わずかに覗く表情は、可愛さと艶めかしさが混ぜ混ぜになったものだった。外見に釣られたら、すぐに性的に食べられてしまいそう。

そして、いやらしい涎を垂らした、先端が開いた尻尾を手前に持ってきている。あれやばい……唾え込まれたら、絶対気持ちいいやつだ。

なんかもう全体的に、私、サキュバスですって主張しまくっているイラストだった。

「これはね、黒影先生の『ウチにサキュバスがやってきた』よ。前回のイベントの新刊だったんだけど、行けなかったからここまで買いに来て……」

「く……黒影先生？」

聞いたことのない名前に、疑問系で返してしまう。

「黒影先生もサキュバスものメインで、一方的な凌辱というよりも甘めの作風かしら。それで、母性あるキャラが描けるところを尊敬していて、胸に抱かれたまま眠りたいって思わせる魅力があるの。あと、誘惑ものも得意で、我慢し続けていた心がぼつきりと折れるシーンはもう最高で……。今回の話はなんと、これは言っちゃダメだったわ。なんて表現すれば……サキュバスと同棲するリアルな感じ？　とにかく楽しみでね……」

こんなことでもオタクモードになるのか。店内ということもあって、もう少し声を抑えてほしいのに。

近くの人に視線を向けると、引くどころか、興味深そうに聴き入っていた。同じ場所に集まっている者同士、理解し合えるのかな。僕も、瑠瀬の説明に興味関心を隠しきれず、その本に手が伸びてしまう。

「ちょっと買ってみようかな？」

「そうした方が良いわ。ちなみに、私が一番好きなのは『お母さんサキュバスのぶぶぶえっち』で、ここにあればいいんだけど……DL販売でもいいんじゃない？」

「う、うん……わかったよ」

その後も、グルリと探索していき……。

エロ漫画に囲まれているときの瑠瀬は、かつてないほど目が輝いていた。どうして、これほど幸せそうにしているんだろう。一体どういう理由で、エッチなコンテンツに興味を持ち

始めたのか。まだわかっていないことが多い。早くすべてを知りたい。そのためにも、もっともっと一緒にいなければ。

数十分後、僕たちは満足した面持ちで店から出た。

瑠瀬は、黒影先生の新刊とその他にも数冊買っていた。レジに通すとき、恥ずかしがる様子を一切見せなかった。歪みねえよ。普通はカモフラージュしたり、店員を見ないようにするものじゃないのか。

僕はというと、瑠瀬の目当ての同人誌と香子先生の単行本を購入した。おススメされたものをすべて買おうとしたけれど、財布にかかる負担が大きすぎて諦めざるを得なかった。

そして、待ち合わせ場所だった公園に戻って来た。

太陽が照る青い空の下、エロ漫画を持った男女が仲良くベンチに座っている。相変わらず、僕たちしかない世界だった。

今だったら、あの話を聞けるんじゃない。勇気を振り絞って一言――

「あの……」

「どうしたの？　ここで読んでもいいのよ。私しかないし」

「そうじゃなくて、その……なんで同人活動をやってるのかなって……。嫌だったら無理に言わなくてもいいから」

「んう……好きだから……かしら？　好きだからやっている。ただそれだけのことよ」

きわめて普通な答えに拍子抜けしてしまう。

「でね、好きになった理由は、母さんの仕事に影響されたから。初めはそういうのに慣れなくて……というか、苦手だったんだけど、母さんの話を聴いていく内に素敵って思えるようになって、自分でも描き始めることにしたの。そうして、今の私が生まれたってわけ」

「そうだったんだ。瑠瀬のお母さんも同じジャンルの人？」

スポーツという括りでも、野球やサッカー、マラソン、市民権を得ていないものまでたくさんあるように、エロにも数えきれないほどのジャンルがある。

「うーん、得意分野は性愛かしら？」

「それじゃあどうして？」

突如表情を暗くし、俯いてしまう。とっさに謝ろうとしたが、顔を上げた彼女は、覚悟を決めたような凜とした面持ちになっていて、謝罪の言葉は喉元で止まった。

「……私、子どもの頃いじめられてたの。小学生のときは、父がいないせいで仲間外れにされて、母さんがエロ漫画家だったことから、中学生になると痴女とか援交女ってからかわれて……。まったく、そんな情報どこから仕入れてきたのよ。それからは、目立たないように過ごしてきて……あのときみたいに変なこと言われたくないし」

苦い記憶をすりつぶすように語ってくれる。

こんな過去があったなんて。掘り起こさせて申し訳なくなるが、打ち明けてくれたことに

感謝している。

「ごめんね……。でも、今の活動とどんな関係が？」

ただ、聞きたかったのはこういう話ではない。男性受けというジャンルで描き始めた理由だ。

「そうだったわね。これには続きがあるの。どうしても彼らに仕返ししたくなって……。我慢できないほど憎たらしくなってたの。とはいっても、そういうことをしたら問題が大きくなるだけだし、返り討ちにあうのもわかってる。下手をしたら、もっと酷いいじめを受けることにもなる。そこで考えたの。物語の中で絶対に負けないキャラを演じて、みんなをいじめてやろうって。母さんの影響でエロ漫画を読み漁ってたときに、サキュバスの存在を知ったの。どれも、男がサキュバスに負ける話ばかり。それを読むとすごいスカツとして……。その強さに惚れて……。そこで思ったの。サキュバスを演じれば、私をいじめてた人たちなんて一瞬で墮とせるって。それで、恨みを晴らすために描いてたら、止まらなくなって……。それから、母さんに勧められるまま同人活動を始めてみたの。ねえ？ 引いた？ 仕返し目的と知って幻滅した？」

いじめでストレスが貯まるのは当然だし、発散しなければ生きていけない。溜瀬にとっての発散方法が、自己投影できる創作活動だっただけ。

「幻滅なんてするわけない！ 実は、僕もその……。書いてた小説が見つかって、馬鹿にされた経験があるんだ。特におかしくないはずだよ。溜瀬だって創作してるし。それなのに、僕だけがおかしな人扱いされて……。それに、持ってたライトノベルを取り上げられて、『変なの』とか『気持ち悪い』って貶されて、それが頭に来て刃向かったらボコボコにされて……。そんなことでムキになるなってまで言われて……。そんなことだよ、そんなこと……。うう……。何も間違っていないはずだよ。実際に読んで具体的な理由を付けて面白くなかったのならまだ許せるけど、まったく知らないのに一方的に馬鹿にするなんて、絶対おかしいって……。」

それで、みんなと同じことをしないと決められるって気づいて、周りに合わせようって……。勝手な行動をしないでみんなの顔色うかがって過ごそうって……。あ、ごめん。愚痴みたくなって……」

好印象与えるために被っていた仮面は、周りとズレた人になりたくない。そうになったら、またいじめられてしまうから。そこから生まれたものだ。

みんなと違う存在を排斥しようとする思想の餌食にされ続けた過去がある。

今度こそ仲間になろうとしたのに、結局なれなくて……。

刃物で胸を貫かれたような気分になる。心がひしゃげて、感情が壊れてしまいそう。もう、まともに思考すらできない。

僕の容態を察してくれたのか、慈愛に満ちた言葉で慰めてくれる。

「世間から気持ち悪がられる物を創っていたとしても、それを貶す方が気持ち悪い。情熱を持って取り組んでいる人を馬鹿にすることは、最低の行為なの。まあ、これは母さんが言っ

てくれたことなんだけど。だからね、あなたは何も悪くない。小説を書いていたのは、とってもいいことだし、好きな作家先生を馬鹿にされて刃向かったのは素晴らしいことだと思うわ。あと、周りと違うからって、やりたいことに嘘をついちゃダメ。枠から外れても、自分が望んだことをしなさいって太田先生も行ってたでしょ」

ギュッと抱きしめてくれた。初めての抱擁——それは感動的で愛情がこもったものだった。

瑠瀬の温かい声と体、彼女の母とまさかの太田先生のおかげで、完全とはいかないまでも、トラウマを克服できた気がする。

「ありがとう……」

涙腺が緩み、次々と涙が溢れてくる。悲しさや辛さからじゃない。それは、僕自身が一番よく理解している。

落ち着くまで、ずっとその優しさに包まれていた。その間、冷たくなった背中をさすりながら、黙って見守ってくれていた。

どれぐらいの時間が経ったのだろうか。涙交じりのままもう一度感謝を伝えて、抱擁を解いてもらう。

「瑠瀬のお母さんって、ほんとすごい人なんだね。僕もお世話になっちゃたよ」

いずれは会う予定の瑠瀬の母。彼女には、感謝しても仕切れない。

シングルマザーとして、ずっと子育てをしてきたらしい。瑠瀬が受けたいじめにも真摯に向き合ってあげて……母の鑑といえる存在だったんだな。

それとは別に、性愛をメインに描いている作家先生で、サキユの宮さんの活動に大きな影響を与えているそうで……。

ん？ ひょっとして——！

「もしかして、瑠瀬のお母さんって香子先生？」

「あれ？ 言ってなかったかしら？ そういえばまだだったわね。咲ノ宮香子、母さんでもあり、尊敬してる作家先生なの」

「やっぱり……」

さっきしてくれた話と、香子先生が明かしている情報がどことなく似ていると思ったら、本当にそうだったのか。

「これは会うとき緊張しちゃうなあ……」

瑠瀬の母というだけでも体が強ばるのに、それがエロ漫画の最前線で活躍している香子先生だとわかると、よけいに硬くなってしまう。

「大丈夫よ。怖い人じゃないし。それに、コミフェですぐ会うことになるんだから、そう緊張しなくてもいいじゃない」

「いやあ……コミフェ行こうか悩んでるんだけど……」

魅力を感じているのは確かだが、勇気を出せずまだ一度も行けてない。幸いなことに、DL販売でほしいものは買えているけれども。

「ん？ これもまだだったわね。あなたに売り子をやってほしいの。書いたものを出すんだし、ちようどいいでしょ？ それで、母さんもコミフェに参加するし、そのときに顔合わせられるかなって……」

「僕が売り子！？」

「やっぱりダメ？ 無理ってはっきり断ってくれば別の人探すけど」

「ううん……」

正直なところ、務まるのか心配だ。だが、これも瑠瀬を知る良い機会じゃないだろうか。どういう気持ちで同人活動に向き合っているのか、傍にいたらよくわかるはず。

「やる！ やってみたい！」

「ありがと。……あ、あのとき、復讐のために描き始めたって言ったけど、今はそんなことないから。最初に言った通り、好きだから描いてるの。描いてるときはとても楽しくて……それに、みんなから感想もらえるのも嬉しくて……。そうそう、子どもの頃に書いた小説ってどんなの？ 見せてもらえることってできるかしら？」

「うっ——それはちよつと……」

内容が内容のせいで、むず痒くなる。あまり思い出したくない。

「見せられないようなものってこと？」

「恥ずかしくて……」

「初めの方は、未熟なところもあるから仕方ないわよ。まあ、初期の作品のおかげで、新作が出来ているのは確かなんだけど。それで、次どこ行く？」

話し過ぎていたせいで、デートをしていたことをすっかり忘れていた。

よくよく考えたら、ご飯食べてエロ漫画買って、過去を打ち明けただけじゃないか。こんなの、理想としていたデートじゃない。それでも、かつてないほど満たされているから大丈夫だ、問題ない。

「今日はもうこれぐらいでいいかな。また今度、時間があつたときでいい？」

「またしたいけど、あなたも私もやることがあるでしょ」

僕は小説を仕上げなければならいし、瑠瀬はサークル主催者としての仕事がたくさんある。それが一段落するまで、デートは難しいだろう。

「わかってるって、絶対に合わせてみせるから」

「お願いね。それから、母さんも黒影先生も喜ぶだろうから、しっかり感想書いてあげるのよ。私もこれ読むのが、楽しみで楽しみで……」

以前も言っていた、感想の呟きを促してきた。それは既に理解している。

それよりも、最後の言葉のせいで、瑠瀬がエロ漫画を読んでいる姿を想像してしまつて……。読んでいるときは、一体どういう気持ちなんだろう。どんな感じで乱れているのかな。いけない妄想が、次々浮かび上がってくる。

「何してるの？ 早く帰るわよ」

この考えがバレずに済んで助かった。バレていたら、いつものSモードで責められていた

に違いない。それもそれで幸せだけど。

僕たちしかない公園を出て、駅を目指して歩き始める。着くと同時に電車がやってきた。一旦の別れ。明日また学校で会えるし、ツブヤイターでいつでも話せる。電話だってできる。寂しくない。

夏休みに入り、数週間が経った――

小説を書き切った段階で終わりじゃない。瑠瀬がイラストを描かなければ、完成品にならない。文字と絵、それが合わさって作品となるのだ。

そのことを理解している僕は、全力で執筆活動に取り組んでいた。ずっとパソコンに向かって、疲れたらベッドで睡眠。目が醒めたら、またキーボードを打っていく。これを何日も繰り返して……。

「終わった……」

長く苦しい戦いを迎えたときのような、達成感に包まれた言葉を吐き出した。

指定された文字数になるように調整し、何度も推敲を重ねてきた。自分で使えるかどうか試してみた。これで本当に終わったはず。

原稿を納めようと、メールを作成していく。

送信ボタンを押すときの緊張は、ここ最近で一番だったかもしれない。

気づいてもらうまでに時間がかかるだろうし、ツブヤイターに連絡を入れておこうかな。いや、電話でいいか。依頼主であると同時に、恋人でもあるのだから。ちょうど、瑠瀬の声を聴きたいと思っていたところだし。

日が変わる直前といってもいいぐらいの時刻だけど、少し前にコミフェ告知の弦きをしていたし、まだ起きているはずだ。

家族以外に電話をかける。初めはぎこちなかったこの動作も、もうすっかり慣れてしまった。恋人との会話は、それほど日常に溶け込んでいる。

しばらくすると、聴きたかったあの声がスマホから流れ出す。

『こんな時間にどうしたの？ 何かあった？ 話ぐらいなら聴くけど……』

深夜の電話にも苛立ちを見せず、こんな時間だからこそ何かあったのではと心配してくれた。優しさが滲んでいて、ついついうつとりしてしまう。

「瑠瀬の声を聴きたくてね」

大切なことがあるというのに、心の声が漏れてしまった。すかさず、本題に切り替えていく。

「頼まれてたものあるでしょ。さっき送ったんだ。それを知らせたくて……」

『あら、早かったのね。ありがとう、しっかり完成させてくれて。今から読ませてもらうわ』
「……おやすみ」

『もういいの？ それじゃ、おやすみなさい』
包まれるようなおやすみで、電話が途絶える。
おやすみという言葉通り、布団にもぐって眠ることにした。

目が醒めると、一通のメッセージが届いていた。特定の箇所を直してほしいらしい。いくなれば、リメイクだ。

終わったと思っていたばかりに悔しくなるが、完成度を高めるためにこの作業は欠かせない。作品の質が良いほど、当然評価も上がる。

瑠瀬の言う通り、もっと細かく表現できる場面がいくつもあった。それに、わずかな誤字脱字も。

数日かけて、リメイクに励む。そして、今度こそという願いを込めて、再度納品する。結果は合格——サキユの宮さんに認められ、初の仕事は成功に終わった。

それだけで大きな達成感を得られたが、コミフェ当日に仕事分のお金もいただける。後は、完成を待つだけ。

コミフェ前々日、ツブヤイターにダイレクトメッセージが一件。完成品を送ったとの連絡だった。

覚悟を決めて、協同作品を読み始める。

「うわぁ……これ、スゴッ——！」

表紙の時点で目を輝かせてしまう。とてもエッチなイラストで、それだけで身体が満足するほどだった。挿絵も素晴らしいの一言。

だが——作品が完成して嬉しいはずなのに、どうしようもなく不安になる。

サキユの宮さんのイラストと僕の文章は、釣り合うのか。僕のせいで、クオリティを下げてしまわないだろうか。そして、お金を出すのに値するものなのか。黒い感情が離れなくなる。

いよいよコミフェ当日。

前回の反省を踏まえ、無事待ち合わせの二十分前に着くことができた。緊張や恐怖でなかなか眠れず、早めに起きてしまったのだ。

じっと佇んでいると、初デートと同じ服装をした瑠瀬が駆け寄ってくる。

「ごめん、待たせちゃった？」

「ううん、大丈夫だよ」

瑠瀬のためなら、何時間、何日でも我慢できる。数十分程度なら待ったに入らない。

このまま会場に向かいたいところだが、どうしても気になることが一つ。彼女の少し後ろに、見慣れない女性が立っているのだ。

瑠瀬とは正反対の巨乳で、大人の魅力を放っている。薄着ということもあって、余計にいやらしい。

忙しいのかオシャレに興味がないのか、髪が長くバサバサしている。それはそれで色っぽい。

メガネをかけていないが、顔立ちが瑠瀬に似ていて……。

おそるおそる、質問を投げかけてみる。

「あ、あの……香子先生ですか？」

「ん、そうだが」

やはり、この人があの香子先生で、瑠瀬のお母さんなのか。

「僕は……」

自己紹介をしようとするが、遮られてしまう。

「瑠瀬から聞いているから平気だ。彼氏なんだろう」

「か、彼氏!？」

「違ったか。あんなことしたいとか、瑠瀬のこと考えながらいろいろしてるんだろ」

「そ、それは……えっと……」

恋人の母にこんな話をされれば、うろたえるのは当然だ。ここで「そうです」なんて言ったら、どうなるかわからない。そもそも、目の前に本人がいるわけだし。

「もう……母さんったら。すぐにそうやってからかう」

「ははっ、すまん。ちょっとやってみただけだ」

母の暴走を娘が止めてくれた。これで助かって——

「あんなことしたいじゃなくて、されたいって思ってるんでしょ。私にいろいろされてみたい。そうでしょ？」

「うっ——あ、いや……」

この家族怖い。とことんいじめてくる。

「無理して答えてもいいわよ。それよりも……これ、わたしておくわね。今までありがと」

封筒を手渡される。中身を瞬時に理解した僕は、授与されるときのような姿勢で受け取った。

「こちらこそ、ありがとう。貴重な体験になったよ」

紙幣数枚の重さとは信じられない。お金としての価値だけでなく、作品制作にかけた努力や時間、瑠瀬の多大な感謝も感じられる。

「やることも終わったし、さっそく行きましょるか」

「そうだね」

「……ほら、母さんもこっち来て」

「朝から元気だなあ……あたしは眠くて、ふあああ……」

こうして、僕と瑠瀬、そして香子先生の三人で、コミフェ会場に向かうことにした。

三人以上になると急に話せなくなるぼっち体質のせいで、声をかけられたときぐらいしか会話に入らず、基本的に彼女たちの話を聴くだけになっている。

距離感でわかるが、この親子は本当に仲が良いようだ。今の年齢だと、家族と不仲な場合が多いだろうに。どうすれば、それほどの関係が築けるのか。それは、瑠瀬の過去話から、余裕で想像がつく。

電車を使って、人混みに流されて……ようやく目的地にたどり着いた。

写真で何度も見たことがあるとはいえ、実際に目にしてみると、とんでもない光景だった。人が津波のようになって、一つの場所を目指している。

当然のごとく圧倒されてしまうが、置いてけぼりを食らいたくないなので、意志を強く持つて後ろをついていく。

とうとう会場内に――あの三角のところとするものと勘違いしていた。

香子先生といったん別れて、二人で設営を開始する。新刊と既刊を並べていく。もちろん、あの小説も。

「これが……」

「印刷屋さんの力ってすごいでしょ。すっかり小説になってるんだから。そういえば、私が送ったの読んでくれた？」

「うん……」

「なんだか元気ないわね？ 緊張してる？」

「そんなことないと思うけど……瑠瀬はいつもこんな調子でやってるの？」

どうして不安にならないんだろう。いつにもましてエネルギーッシュだし。

その質問に口を閉ざして、胸の前で小さくバツを作っている。答えたくないってことなのかな。いや、これはあれだな。

「サキユの宮さんは、なんでそんなに楽しそうなの？」

今の彼女は、恋人の咲ノ宮瑠瀬ではない。同人サークル『サキユバスパレス』のサキユの宮さんだ。僕も、初芽七草という自覚を持たなければ。

「たしかに初めは怖かったけど、みんなの顔を見てると自然と楽しくなってきたね」

「顔？」

「そう。みんなの顔が好き。満面の笑みだったり、照れてたり、帰ったら早速使うぞっていう顔もあったり……。いろいろな人がいるけれど、幸せそうにしているのには変わりはない。それに、『楽しみにしてました』『応援してます』って直接言われるときもあって……。だか

ら、早くみんなと好きを共有したいの。この考えわかってくれるかしら？」

「僕……僕は……」

小説の感想をもらったときは嬉しかったし、サキユの宮さんの話は理解できる。でも——
「その……すごく恥ずかしくて……出来も不安だし……本当にこれでもいいのか心配で……」
「七草さ……あなたはこれを書くときに、手を抜きまくったの？ お金をもらえればいいとだけ思って、雑に仕上げて……。みんなに見せられないような出来だから、頒布するのが不安。こんなのを作った自分が恥ずかしい。そういうこと？」

かつてないほど努力したのに、どうしてこんなに馬鹿にされるんだ。

「違う！ そんな風にやってない！ 必死になって書いたんだ！ 一生懸命やってる人を貶すのは、最低だって言ってたくせに……なんで……」

声を荒げながら、この作品に向けてきた想いをぶつける。

「ごめんなさい、あなたの気持ちを確かめたかっただけなの。あなたは頑張ってきた、それは私が一番良くわかってるわ。文章から頑張りが伝わってきたし、リメイク出したら、格段に良くなって返ってきたもの。手を抜いてたら、ここまでできないでしょ。」

だから——自信を持ちなさい。自分の作品は面白い、みんなに使ってもらえるはず、良い結果になるに違いない。んう、頒布するんだから……絶対完売できる、もう売れる気がしないって感じかしら。一生懸命やったって自覚があるんだったら、自信を持てるはずよ。そうしたら、恥ずかしさも不安も吹っ飛んじゃうから」

「……でも、おかしい、気持ち悪い趣味って思われて、前みたいにいじめられたら……。お金を出すんじゃないかって……」

「もう、そんな心配しなくていいのに。作品を見下す人なんて、ここにはいないわ。同人は好きなことをするための場所で、趣味をさらけ出すところ。内容が合わなかったら離れて、好きな人同士でとことん楽しむの。同じ趣味の人ばかりになるんだし、あなたのことも理解してくれるはずよ」

その言葉に強く頷いた。サキユの宮さんの話で目が醒めた。

自信を持てばいいだけだったんだ。自信があれば、負の感情が生まれることもない。

そして、この場には僕をからかう人なんて誰一人いない。みんなと好きを共有すればよかっただけだ。

「ありがとう、サキユの……いや、ありがとう、溜瀝」

「わかってくれて何よりだわ」

中断させてしまった作業を再開し、ようやく準備が整った。サキユの宮さんも、設営完了と呟いたらしい。

とうとうコミフェが始まった。同時に、大群が押し寄せてくる。それに驚きと感動を覚えてしまう。とは言っても、僕たちのスペースに来る参加者は、そこまで多くない。数十分たっても、両手で数えられるほどだ。列ができることはないだろう。

それをわかっているのか、こう声をかけてきた。

「挨拶回りとほしい作品があるから席外していい？」

「え、ああ……わかった」

「ありがとう。なるべく早く戻るから」

サキユの宮さんが去って数分後、好きを共有する人がまた現れた。

メガネをかけた細身のイケメンで、ステレオタイプなオタクとは対照的だった。厳しそうなその顔には、見覚えがあつて……。

「せ、先生!？」

ここは右も左も先生だらけだが、作家先生という意味ではない。彼は、僕の学校の教師——太田先生だった。

「おや、誰かと思えば……サキユの宮氏に無理矢理売り子をやらされてるのか？」

「……いえ、違いますけど」

サキユの宮さんに逆うことができない。弱みを握られている——そんなことはない。自分の意志でここにいる。

あれ？ さっき、サキユの宮氏って？ なんで先生が溜瀬の同人活動を？

「まあいい。新刊両方ともお願いする」

訝しみながら、サキユの宮さんの新刊と協同作品を一部ずつわたす。

僕の小説が読まれると思うと恥ずかしく……いや、自信があるから恥ずかしくない。

「あと、これ——サキユの宮氏にわたしておいてくれ。今は席を空けてるんだろ」

やっぱりサキユの宮氏と呼んでいる。どうしてバレているんだろう？ これってまずいんじゃないのか。

わたされた紙袋を手取る。そこには、大きく『細川フトオ』と書かれていた。

「細川さん!？」

「なんだ急に？」

意外な文字に、ついつい叫んでしまう。いつも感想をくれる大切な読者でもあり、友達でもある細川さんの名前がどうして……。もしかして、太田先生が細川さんなのでは？ そう信じて、すぐさま自己紹介をする。

「僕です、僕。あ、えーと、初芽七草です」

「ほお……それは……。私が細川フトオだ」

予想は間違っていたかった。中の人に絶句する。

「いつも楽しみにしてるから、これからも頑張れよ」

「あ……ありがとうございます！」

直接応援の言葉をいだけた。たった一言が、こんなにも嬉しいものだったとは。サキユの宮さんの言った通りだ。

「この小説、僕が一生懸命書いたもので……その……帰ったらぜひ読んでください」

自信作を勧めていく。相手は細川さんだ。気に入るに違いない。

「そうらしいな。サキユの宮氏の眩きでそれは知っていた。七草氏も宣伝すればよかったん

じゃないか」

「あ、あはは……忘れてました」

なんでしなかったんだろう。情報発信ツールをもっと有効に使えばよかったなあ。サキユの宮さんは何度も宣伝していて、その眩きは僕も目にすることがあるというのに。

「もちろん読ませてもらうし、感想も伝える予定だ。……っと、あまり長居すると迷惑になるだろうし、またネットで会おう」

「ありがとうございます！」

細川さんは、この活動を非難せずに応援してくれた。いまさらだけど、本当に教師だったんだな。

彼が去った後も、数人の参加者が、幸せそうな表情をしながら僕たちの作品を手にとってくれた。細川さんのように、ありがたい言葉をかけてくれる人までいた。こういうことを経験すれば、この場が好きになって当然だ。サキユの宮さんの気持ち、十二分に理解できる。しばらくすると、とびきりの笑顔をした彼女が帰ってきた。

「一人で任せちゃってごめんね」

「嫌なんて思っていないから大丈夫だよ」

「それならありがたいわ。で、何か困ったことあった？」

「太田先生が来て焦ったけど、実は細川さんで……僕を応援してくれて……。そうそう、これをサキユの宮さんにつて」

一番印象に残ったことを拙い語彙で説明しながら、彼からいただいた紙袋をわたす。

「細川さん来てくれたんだ。それに差し入れまで……お礼言っておかないと」

「サキユの宮さんのこと知ってたけど、何があったの？」

「ネットで知り合って、ここで出会っただけよ。中の人には驚いたけど」

僕の周りには、趣味を同じくする人が多いんだな。年齢や性別は違っても、好きが一緒なら、気持ちを通じあうこともわかった。

「七草さんも行ってきていいわよ。手元にお金あるでしょ。ここは私がやっておくから」

「ありがと」

サキユの宮さんにこの場を任せて、サークルスペースを離れる。

初めての仕事で得たお金と、応援している作家先生の作品を交換していく。そのときに、感謝の言葉も添える。作り手と交流ができる貴重な機会だった。

それから数時間が経ち、撤収のときを迎えた――

「ちよっと残っちゃったわね」

新刊を七十部、協同作品を三十部用意していたが、どちらも少しばかり残ってしまった。既刊は無事完売した。

「二部、七草さんが持っていてちょうだい。あとは私が保管しておくから」

「そんなの悪いよ。というか、なんで二つ」

「使用用と保管用ってことで。それに、これは七草さんが書いたものなんだし、持っておく

べきでしょ」

「言われてみれば……それ二つだけもらおうかな。他のはこれでいい？」

自信作は受け取り、新刊はお金と交換した。

「ありがと。それと、もう一ついい？」

「なに？」

「これにサインしてもらえないかしら？」

初めての会話が脳裏に浮かぶ。あのときは断ってしまったけれど、今ならできる。

「わかった。ちょっと待ってて……」

ぎこちない動きながらも、自分の小説に名前を記していく。

「……はい、どうぞ」

「大切にするね。私のも大事にしてる？」

「うん。あれを見ると、友達になったときを思い出して……。でも、もっとほしいから、これにサインしてもらってもいい？」

「もちろんいいわよ」

僕と違って、慣れた様子で新刊にサインしていく。

「ありがとう」

「どういたしまして。それじゃあ、撤収作業始めるわよ」

この作業も、終わりが近づいてくると……。

「おーい！ サキュ、調子はどうだ？」

香子先生がやってきた。

親しい作家先生だからこそできる、『サキュ』という呼び方が羨ましく感じる。僕はまだ通称では呼べず、『サキュの宮さん』なのに。

「うん、もうすぐ終わるから。……あ、でも、黒影先生と打ち上げがあるから、一緒には帰れなそう」

「今回もか。なるべく早く帰って来いよ」

サークル同士での打ち上げて、本当にあるんだなあ。

黒影先生ってどこかで聞いたような……。ああ、あのときの。初めてのデートで訪れた書店と、そこで買った同人誌を思い出す。サキュの宮さんが絶賛していたこともあって、それはもうめちゃシコだった。

「七草さんもう？」

「僕！？ 僕は……遠慮しとく」

ネットのつながりがなく、どんな人かわからないし、相手も迷惑しそうだし。

「無理に付き合わせちゃ悪いものね。七草さんのこと伝えておくから」

「う、うん……お願い」

「今日は最高に楽しかったわ。ありがとう」

サキュの宮さんが去っていく。心に響く感謝の言葉を残して――

「よし！ んじゃあ帰るか」

「あの……香子先生は打ち上げ行かないんですか？」

「ん？ あたしは体力的に無理。締め切りギリギリで徹夜してたせいで、もう眠くて眠くて……」

仕事で徹夜して、一睡もしないままコミフェに……作家先生の凄絶な過ごし方を垣間見た気がする。

「お疲れさまです。香子先生の単行本書きました。その……使えました」

「サンキュ。あたしもサキュからもらった小説読ませてもらったぞ。いいもん書いてんじゃねえか。二人の息もびったりだし」

「ありがとうございます！」

みんなから絶大なパワーをもらったおかげで、出会ったときの気まずさは解消されていた。素直な感想も伝えられて満足だ。

「どうだ？ 一緒に帰るか？」

「お願いします」

そして、幸せな夢を見せてくれた会場を後にする。

「それで、どう思ってる？」

しばらく歩いていると、いきなり話を振ってきた。

「えっと……香子先生はすごいなって……」

「すまん。あたしじゃなくて、瑠瀬のことだ」

さっきの質問は、サキュの宮さんのことだったのか。それ以前に、もうコミフェは終わったんだ。現に、瑠瀬と呼んでいるし。いつまでも先生呼びでいいのかな。

「その前に、これからは香子さんと呼んでもいいですか？」

「好きにしていーいぞ」

「それで……瑠瀬、さんは……」

「あたしの前だからって無理に慣れない感じにしないでいい」

「は、はい。えっと……周りと比べたら地味だけど、それでもとても可愛いし……。オタクモードの瑠瀬も気に入って……あの話をずっと聴いておきたいなって。その……あの……瑠瀬の全部が好きで……」

「あんまりこんなこと言いたくないけど、変とか気持ち悪いって思っただけか？」

「同人活動のことですか？」

「ああ」

「思いません！ 同い年なのに、もうしたいことを見つけてるんですよ。それって、すごいことじゃないですか。あと、イベントのときすごく楽しそうにしてて、自分がやっていることに誇りを持っていて……。瑠瀬に励まされて、僕も頑張ろうって決めたんです」

「よくわかった。瑠瀬のこと大事にしてくれてるんだな。助かるよ。せっかく男作っても、すぐフられたらどうしようもないからさ。あたしのときみたいに……」

確か、お腹に子を宿しているときに離婚したんだっけ。

「その……出産前に別れたと聞いたんですが……何があったんですか？」

「瑠瀬には話したんだがな……。この仕事を秘密にしたまま結婚したんだけど、ある日それがバレちゃって……。そしたら、気持ち悪いって愛想尽かされただけさ」

「……その……大変でしたね」

「ほんとだよ、もう。だから、瑠瀬にはいい男を選んでほしくて……好きなことを肯定してくれる、すべてを理解してくれる男をな。——あんたなら任せられそうだ」

「ありがとうございます！」

認められた。それはつまり、つき合っても——否、それ以上のことをしても良いということ。

「つてことで、これから頼んだぞ。瑠瀬も一緒にいることを望んでるみたいだし」

「はい！」

将来の展望が開かれる。瑠瀬と過ごし続ける未来が見えてくる。

いつかは親に相談しないといけないのはわかってるし、これから先どんなことが起こるかわからない。問題も、山のように積みあがるだろう。

それでも、二人ならどんなことだって乗り越えられるはずだ。

香子さんとも別れ、家まで帰ってきた。

かつてないほどに心が満たされている。その気持ちが顔に現れていたらしく、何かあったのか聞かれたほどだ。瑠瀬を連れてくるときまでは、黙ったままにしておきたい。

部屋に戻って、戦利品と呼ばれるものを取り出す。

そうして、慣れた動きでツブライターを起動する。

香子先生が、僕のアカウントをフォローしてくれていた。それに、黒影先生まで。打ち上げをしている瑠瀬が、教えたのだろう。

あと、シエスタというアカウントにもフォローされていた。このアイコンって！ 薄い本を手にして確認する。やっぱ、瑠瀬に勧められた『ウチにサキュバスがやってきた』の表紙絵だ。自己紹介文に、黒影さんのサキュバスですと書かれているし、黒影先生のボットなのだろうか。それにしても、生活感のある眩きだけど。

これも縁だ。全員にフォローを返していく。

そうして、夜も更けていき——寝る前に愉しんでおこうかな。準備を整えた直後、スマホが軽快な音楽を奏で始める。最近になって頻繁に耳にする着信音だ。もちろん、誰からかわかっている。

『今暇かしら？』

「うん、特にやることもなかったし」

『ほんと？ さっそく使おうとしてたんじゃ……もうこんな時間だし』

「い、いやあ……瑠瀬が一番だから大丈夫だって」

『そういつてくれると嬉しいわ。それで、帰りに母さんと話したんでしょ？』

「うん……」

瑠瀬の母が、僕を認めてくれたことを伝えるべきなのかな。

『どんな話かは教えてもらったから、聞かなくてもわかるわ』

「知ってたの！？」

『ええ。でも……ご家族さんへの挨拶はもっと後にしたいの』

「それって……」

『前も言ったけど、そういうことはまだ早い気がして……』

まだ早い。その考えは十分理解できる。だからこそ、その言葉に抗うことができなくて……でも、少しぐらいはしてみたい。それが男の性ってものだ。

「キ、キスもダメ？」

『楽しみは最後まで取っておく人かしら？ もしそうだったら、そのときにしましょ。……私も我慢しておくから……』

後半になるとボソボソ声に変わり、何を言っているのかわからなかったが、どうやらお預けらしい。

ショートケーキは、最後までイチゴを取っておく派だ。初めてのキスだって、あのとににするのが一番気持ちいいはず。

「……わかった」

『それで……これから恋人らしいことをたくさんしたいの』

「恋人らしい？」

『えっとね、プールや夏祭りに行ったり、ハロウィン、クリスマスも一緒に過ごして……あと、初詣にも行って……。それからそれから、前みたいに新刊買いに行って……もちろん次のコミフェも行くわよ。まだまだしたいことたくさんあって……』

次から次へと、二人で過ごす予定が語られる。その光景を思い浮かべるだけで、胸の奥から温かいものが生まれてくる。

「すっごく楽しそう！ そうだ！ 明日か明後日、プール行こうよ！」

さっそく誘ってみる。瑠瀬の水着姿も見てみたいし。

私服が地味だったこともあって、派手な水着は着ないはずだ。もしかして、至高のスク水という可能性が！ 紺に輝く繊維が、ぴつたりと肌に張り付いている様子は、暴力に等しいほどの魅力がある。

控えめな膨らみが形成されて、お椀が二つ付いているような感じになるに違いない。そして、太陽に照らされてまぶしい光を放つ太股、三角に整ったラインも目に入ってきて……。裸体よりも遙かに情欲を誘う、スク水姿。それを想像すると、瞬く間に脳内がピンク一色

に染まってしまう。

『じゃあ、明後日行きましょ。時間とかはまた明日考えるから。……それと、さっき私の水着姿想像してなかった？』

「いやあ、そんなことは……」

『別にごまかさなくてもいいのよ。正直に言った方がいいんじゃない？』

なに考えてるのよ、この変態！ こんなテンプレヒロインの反応にならないのは、男の本能——性欲を理解している瑠瀬らしい。

「す、スク水……」

誤魔化せないと悟った僕は、いつにもまして小さな声でそう口にした。

「スク水好きなのは知ってるから、特に驚かないわ。ただね、望むようなものにはならないと思うわよ。その……胸ちっちゃいし……」

胸の大きさにコンプレックスを抱いているのか、照れながら話しかけてくる。その可愛さに、一発でノックアウトされる。

たしかに、スク水は爆乳少女が着るべきもの。でも、それは二次元のエッチなコンテンツに限ってだ。

「そんなの関係ないって。現実と創作の違いぐらいわかるし。僕はただ、瑠瀬の水着姿が見てみたいだけで……あ、ごめん」

つつい本音が漏れてしまう。それに気づくと同時に、謝罪の言葉が勝手に出ていた。

『別に謝らなくてもいいのよ。……そこまで言われたら、着てみようかしら？』

「え！？」

『当日まで楽しみにしておきなさい』

これからたくさんするデートの一つとして、明後日プールに行くことになった。性欲旺盛な思春期男子らしく、恋人の水着姿に胸と股間が膨らむ。

『そうそう、近い内に例の小説も販売されるわよ。どんな評価になるのかしらね？』

「うう……自信があるとはいえ、ちょっと不安……」

『大丈夫だって。私が保証するわ』

「ありがとう。それで、その……これからも瑠瀬……サキユの宮さんの力を借りるかも知れないけど、そのときはよろしく」

『こちらこそ。新作楽しみにしてるわね』

「早く投稿できるように頑張るよ。……おやすみ」

『おやすみなさい』

後日、約束通りプールに行った。本当にスクール水着でやってきて、その可愛さと艶めかしさが、脳天を直撃した。市民プールではスク水を着ないこともあって、恥ずかしそうに振舞っていた。そのせいで、エロさが増してしまい……。

夏祭りでは、瑠瀬の浴衣姿を拝むことになった。その姿がまた最高で、脳味噌がとろけてしまうほどだった。そこで、金魚すくいや射的をしたり、チョコバナナを食べる様子に性欲を刺激されたり……。もちろん、夏祭りの目玉、花火だって一緒に観た。

サキユの宮さんの新作は、今まで以上にエッチなもので、夜のローテーションがまた一つ増えた。

協同作品も発売された。売り上げも評価も上々で、レビューで文章が褒められていたときは、ガッツポーズを取ってしまった。当然のように、細川さんから感想をいただけた。

新たな小説を投稿するときに、サキユの宮さんに挿絵を描いてもらった。恋人だとしても、お仕事を頼むのだから、お金を支払うのは当たり前。その小説は、またもや高い順位を叩き出した。これで、僕の知名度も少しは上がったのだろうか。

冬休みに入ると、僕——初芽七草とサキユの宮さん、香子先生、細川さんとでオフ会を開いた。趣味話のはずか、瑠瀬との将来の話になってしまい、彼に僕たちの気持ちを正直に伝えることにした。教師という立場から、渋い顔をすると思ったけれど、卒業後が楽しみだなと笑顔で答えてくれた。

それから、黒影先生とも会うことができた。眩きでなんとなくわかっていたが、男性の作家先生だったようだ。彼の隣にいた、爆乳の女性がすごく印象に残っている。サキユバズミたいなオーラを放っていて、弱い精神が犯され魅了されかけた。それからしばらく、瑠瀬がSモードを解除してくれなくて恐ろしかったんだよなあ。

その後も、クリスマスと一緒に過ごして、初詣も二人で行って……。

エッチなことはまだお預けにされたままだけど、気にならないほど充実した生活だった。

それに、いつか——来るべきときに、心も体も繋がる予定だ。そのときまでは、今の恋人生活を続けておこう。

エピローグ 彼女に捧げる愛情の証、芽生える幸福

日が変わるギリギリの時間に、瑠瀬の自宅前に立っている。家に呼ばれたのは、今回が初めてだ。

手の震えが止まらない。これは、会いたくて会いたくて震えているわけではない。これからのことを想像して震えているのだ。

初めて招待してもらった意味、そして今の時間。これらを考えれば、何が起きるかは明らか。

スマホが十二時を知らせる——日付が変わった。

これまでの恋愛生活で培った勇気を振り絞って、インターホンを鳴らす。

扉が開き、瑠瀬がやってきた。そのまま玄関に案内される。そこに置いてあった卓上カレンダーを見ると、今日の日付に記念日を示す大きな赤丸が入れられていた。友達をやめた日から一年が経った記念だ。

緊張で固くなった足を動かし、導かれるまま瑠瀬の部屋に向かう。その途中、たどたどしい口調で、香子さんについて尋ねてみる。

「……母さんは、新作の打ち合わせがあるって出て行ったわ。しばらくは出版社さんのところから帰ってこないんじゃないかしら」

その話が嘘か本当かわからないが、ここにいないのは確からしい。ということは、この家にいるのは、僕と彼女だけ。

二人きり——それを囁みしめる間もなく、目的の場所に着いてしまう。

室内は、淡いオレンジで照らされていた。その色はどこなくいやらしさを持っていて、今からの行為がより現実味を帯びてくる。

どう始めればいいんだろう。この気持ちをどう表現すれば。思うように言葉を紡げない。

「大丈夫。何を言いたいのか、わかってるから……まずは座りましょ」

肝心なときに臆病になってしまった僕は、瑠瀬の操り人形になって、促されるままベッドに腰を下ろす。

明かりは少ししか灯っていないのに、見慣れた顔は鮮明に映る。かつてないほどに朱く染まっていた。

緊張や羞恥、期待に潤んだ瞳。それを目にするだけで、思考はとろんと溶け、もう彼女のことしか考えられなくなる。ずっと眺めて、脳内に幸せ成分を充満させたい。

だが、それ以上のことができずにいる。この先の展開を想像できて、それを望んでいるにもかかわらず、唇が動かない。

唇——瑠瀬の花唇に、頭をおかしくされていた。ぶっくり膨らんだ唇の柔らかさはどんな

ものなのか。恋人とのキスは、どれほど気持ちいいんだろう。

付き合い始めてから今まで、ずっとお預けにされているキスがほしくてたまらなくなる。

もう我慢できなくなってきた……引かかっていた言葉をようやく口にできた。今回こそ、恋人行為を堪能できるはず。

少し間が開いて――

「……ん」

ふわりとした髪の毛の香りが鼻腔に触れ、口内に蜂蜜よりも甘い味が広がり、瑠瀬の中に溶け込んだと錯覚してしまう。

これがキス。脳が理解した途端、急激に体の奥が熱くなってくる。

彼女の味を覚えようとしたところ、幸せなキスはすぐに終わりを告げ――

「どうだった？」

そう言われても、最高としか表現できない。けれども、一瞬だったせいで、不満の方が大きくて……。

「私も気持ちよかった。でも、物足りないんでしょ？」

無言で頷いた。もっとキスしてみたい、いや、キスされたい。

「……うちゅ、ちゅる……はぁ、じゅる……んれろ……」

今度は唇を重ねるだけでなく、舌も入れられた。ディープキスに慌ててしまうが、抵抗せずに舌同士を絡めていく。

大人の接吻の最中、背中腕が回される。それを真似、包むように抱きしめた。服越しとはいえ女の子らしい丸みを感じられ、自然と撫でるような手つきになってしまう。

抱擁が強くなるに伴って、ディープキスも激しくなる。キスだけでこんな淫らな水音がするなんて。そう思うほど、エッチなキスだ。

口内に瑠瀬の唾液が押し寄せてきて、ゴクンと音を立てながら飲み下す。喉を通る度に体が熱くなり、もっと欲しいと脳が命令を送る。抗うことは出来ず、嚥下し続ける。

「ちゅぷ……じゅる、じゅるり……ちゅるる……」

数十秒にもわたる長いキス。徐々に頭が痺れ、真っ白になっていく。

「れろお、ちゅるり……はぁ、ちゅ、んはぁ……」

苦しいことを察してくれたみたいで、ディープキスを止めてくれた。呼吸面が辛くても、幸せなことには変わりはない。

瑠瀬はどんな気持ちなんだろうと視線をやると……悪の女幹部のような笑みを浮かべていた。直観で、この女性は危ないと悟る。

「もう我慢できなくて……いいよね？」

怖さから制止の声をあげようとしたが、それすら間に合わなかった。

「はむッーじゅる……ちゅる、じゅるる……んちゅ……」

普通のキスではなく、大人のキスでもない。どちらかといえばディープキスに近いが、そんな生易しいものではなかった。

今回のキスは、男に慣れた娼婦のよう——否、それよりももっとエッチで、オスを餌にしているサキュバスの性技。口内を徹底的に犯し、舌を蹂躪し尽すキスそのものだった。

「ちゅぷ……ちゅるり……じゅる……じゅるるる……」

常識外れのキスに、僕の意識は溶けていく。尋常じゃない速さで溶かされる。炎天下のアイスクリームのように、とろとろと溶けてしまう。

何も考えられず、考えられるはずがなく、もう淫魔の接吻に流されるだけになって……。快楽を望む気持ちだが、爆発的に大きくなる。と同時に恐ろしくも思う。なすがままになっていたら、肉体も精神も壊されそう。

ここでおしまいにしようと、頭を前後させ抵抗を試みる。

だが——後頭部に手を回され、動きを制限されてしまう。押さえつけられているのか、体が緩んで力が入らないのかわからないのか、その手はびくともしない。

逃げちゃダメ。もつとあなたで愉しませて。そう言っているような拘束に、絶望を覚えてしまう。

柔道の降参よろしく、何度も背中をタップする。キスだけで、みっともない姿をさらすことになっても構わない。今すぐにでもやめてもらわないと、本当におかしくなってしまう。

敗北宣言をしているにもかかわらず、やめてくれない。キスの檻から解放してくれない。僕を氣遣ってくれるいつもの瑠瀬は、もうどこにもいなかった。

唇經由で何かを送るような、激しすぎるキスが続けている。それは、貯めに貯めた性愛なんだろうが、度が行き過ぎて歪み切っている。

瑠瀬が満足するまで、嵐のキスは止む気がしない。そのときまで、意識を保っていられるだろうか。

「じゅる……じゅるり……れろ、んぐつ、れろり……ちゅる……」

淫魔のキスはさらに強くなる。舌を抜かれ、歯茎を頬肉、そして歯の裏側一本一本まで、ありとあらゆるところを丁寧に舐め回される。未開発の口内が、ひたすら凌辱されていく。

舌同士が絡まり生み出される唾液、それを次々に嚥下する。僕にできることは、それだけだった。呑み込めなかった唾液は、口の端から滝のようにたらたらと流れる。

「んれろ、ちゅる……むぐつ、んはあ……じゅるり……」

初めてのキスは天国の歓待だったが、今となっては地獄の拷問だ。

無理——視界が狭くなり、もう飛んでしまう。接吻で窒息死する。光を失った瞳を閉じかけた瞬間。

「んっ……んぐ、ちゅ……んう——ぷはあ……ふう……」

ようやくキスレイブから解放される。唇同士が離れるとき、美しくも淫らな銀の水橋がかかっていた。

口元が自由になってすぐ、砂漠の遭難者が水を欲すように、酸素を求めて荒い呼吸を繰り返す。彼女と同じ空気を吸っていると自覚して、よけいに興奮してしまう。

「……ごめんね。もつとあなたとキスしたくて、どうしても抑えられなくて……。限界そう

だったからやめることができたけど……」

快楽で頭が痺れていても、瑠瀬の言葉はなんとか入ってきた。僕とのキスが幸せすぎるあまり、こういうことをしてしまったと言われれば、許すしかない。悪気はなく、愛情からの行為なのだから。それに苦しめられたとはいえ、もう一度その愛を受けたいと思っているし、ようやくキスの余韻が治まってきて、目の焦点も定まってくる。

「その……キスしてる間ずっと見てて……。嫌だった？」

即座に否定すると、上機嫌で話しかけてきた。

「うふふ……あなたの表情、とても愉しませてもらったわ。初めの内は気持ちよさそうにしてたけど、だんだん必死な顔になってきて、最後はもうダメ……キスで殺されちゃうみたいになってて……。倒れちゃったらこの先愉しめないから、やめるしかなかったけど……」

それを聴いて、ぞわぞわと背筋が粟立ってしまう。もしも、現代にサキュバスがいたら、彼女がそうに違いない。

「ねえ？ 次は何したい？ どんなことでもしてあげる」

どんなことでも——ドクンと胸が高鳴る。

もう我慢できない、早くあれをしたい。いや、その前に……。男なら誰もが夢見るもの、おっぱいを触ってみたいと口にする。

「え！？ 胸を？ でも……小さいし……」

胸元を隠すようにしながら、羞恥にまみれた声を発した。

大ききなんて関係ない。僕はただ、好きな子のおっぱいを触りたいだけ。それに、属性的にも貧乳の方が可愛いし。そう熱弁すると、慎ましい胸を差し出してくれた。

触ってもいいと解釈して、おそろおそろ手を近づけていく。

そして——おっぱいを揉み始める。

軽く膨らんでいるそこは、服越しでもぶにとしていて心地よい。揉むだけで、圧倒的な幸福が手先から全身に駆け巡る。

癒しや幸せもそうだが、興奮を感じずにはいられない。直で触ればどれだけ柔らかいのか、一体どんな形をしているのか。想像すれば、体がより快楽を求めてしまう。

服の上からでは耐えられなくなって、脱いでほしいと口にする。

「脱いでって……う、うん……」

一瞬戸惑ったようだが、おもむろに脱ぎ始めた。その緩慢な動作に、より情欲を煽られる。早く瑠瀬のおっぱいが見たいと焦がれるが、一番エロい脱衣の瞬間を焼き付けたい。相反する考えに、頭がどうにかなってしまいそう。

とうとう上半身に身に着けているものは、ブラ一枚となった。控えめなのか大胆なのかわからないが、黒色だった。

下着が胸を主張させている。上部から素肌が覗いていて、黒と肌色の対比がとんでもない

ほどエッチだ。

ブラに意識を奪われていたが、露わになった脇や鎖骨、喉元も溜瀬の魅力を底上げしている。特に、脇周辺の筋肉に魅了されてしまう。

脇肉へと手を伸ばし、そこからブラの中をまさぐる。

「ッん……なんでそんなとこ……」

予想外の行動に驚いたのか、可愛げのある声をあげた。

「いきなりこんなことするなんてびっくりしたわよ。普通の人はすぐに取り合えないの？」

疑問を解消してほしいために、ブラに包まれたおっぱいの良さを語り始める。その後、今の状況を思い出して、恥ずかしさに襲われ……。

「もう、本当に変態なんだから。好きただけ触ってもいいわよ」

その言葉に、僕の理性は白旗をあげた。

下着の中に指を入れて、締め付けられたおっぱいを揉みまくる。ブラ越しの感触を堪能する。脇肉の柔らかさ、鎖骨のコリッとした気持ちよさ、真っ白な肌を味わい尽くす。

「あ……やらしい手つきで……ふう……」

快楽で悶える声を聴き、興奮はさらに高まっていく。もっと聴いてみたい、溜瀬の乱れた姿が見たい。いやらしい感情が次々湧き上がってくる。

もう限界。ホックを外してほしいとお願いする。

既に覚悟を決めていたのか、最後の衣服を取り払ってくれた。

生おっぱいが露わになる――

慎ましいかたちながらも、女の子らしくぷっくりと膨らんでいて、すべすべしていた。そして、ピンと張った乳首が激しく自己主張している。

つきたての餅のようにふんわりしているおっぱいと、可愛らしさといやらしさが混ぜ込まれた乳首に、全神経が支配されてしまう。目をそらすことも余所見もできず、完全に釘付け状態だ。

全身の血液が沸騰し逆流を起こしたような錯覚を覚え、鼻息が荒くなる。どうやっても欲望を抑えきれそうにない。

本能の赴くまま、溜瀬の美乳を揉みしだく。

「ッーいきなりそんな……はあ……」

おっぱいから感じる人肌の温もりと甘い匂い、視界に入る美しい胸。そのすべてが、僕の頭をおかしくさせる成分になっている。

気持ちに滾っていけば、より強く揉むことになっていき……。

「んう……ああ、ちょっと……そんな強くしたら……」

痛くさせたと反省し、撫でまわすような優しい手つきに変える。

もちろん、乳首への愛撫も忘れない。淡紅色の果実を摘むように、刺激を欲しがって張っている乳首に爪を立てる。コリコリしているのに、プニプニと柔らかい。女性の――おっぱ

いならでは感触に、惹きつけられてしまう。

「やあ、そこダメっ——ダメだから……乳首ばかり……しないで……」

興奮を高める抗議の声をあげているが、やめるつもりはない。徹底的にいじめられたキスのお返しだと言わんばかりに、おっぱいを、特に膨れ上がった乳首をいじくりまわす。

弾けば、挟めば、擦れば、突っつけば、押し込めば、弄べば弄ぶほど、硬さが増していく。それと共に、股間に悪い嬌声もどんどん大きくなっていく。

「あうう……やめ、お願い……もうダメ……んああ……」

蕩けた表情をしていて、その瞳には涙が溜まっていた。肌も上気していて、全身に汗がにじんでいる。息も絶え絶えで、本当に限界という感じだった。

エロく茹った頭でも、この状況はさすがにまずいと判断でき、指先での攻めを中断する。

「……はあ、はあ……こんなに上手だったなんて……」

いつもの癖から、すぐに謝ると。

「イヤなんて思っていないから大丈夫よ。気持ちよかったのはほんとだし……」

そして、小悪魔らしい声色で、続けて話しかけてくる。

「どうして慣れてるかしら？ 乳首開発でもしてた？」

自分で自分の乳首を責めていた経験を生かして、気持ちよくさせていたのが見透かされていたなんて。

「そういう顔するから、すぐにバレちゃうのよ。初めと何も変わってないじゃない。一人でするのも寂しいでしょ？ いつでも手伝ってあげるわよ」

こんなことを愛する人に言われたら、断れるわけがない。

「ふふっ……まったく、素直なんだから。それで……そっちも素直になってるみたいね」

下腹部を指しながら、そう言葉を紡ぐ。一方的なキスや美乳を揉みしだいていたことで、完全に勃起しきっていた。

「……そんなにしちゃって……今から……する」

溜瀬に聞こえそうなほど、心臓がドクンドクンと音を奏でる。体も心も、最高の快樂を待ち望んでいるのは明らかだ。

「それじゃあ……脱いでくれる？ ううん、私が脱がせてあげる。力抜いて……」

なすがままになっていると、まったく鍛えていない上半身がさらされ、あつという間に大きなテントを張ったパンツだけにさせられた。

「こんなに膨らませて……この中にあなたのが……」

一番大切な部分を見られることになる。少々……いや、ものすごく恥ずかしく、自然と体が強張ってしまう。

「んっ、引っかかって……」

わがままなほど自己主張しているせいで、手間取っているらしい。それでも、数秒後には

脱がされるもので。

恋人の目の前に、小作りという役割を果たそうとしている生殖器が露わになる。

「これが……ふふっ、可愛い……」

男らしい、カッコイイではなく傷ついてしまう。ただ、そう思われるのも仕方がない。成年にもかかわらず、皮を被ったままなのだから。今から大人の愛を確かめ合うというのに、成熟しきっていないなんて情けない。

「……そんな顔しないで。私は好きよ、あなたの……。でも、これって剥かないといけないのよね？」

もちもちとした手が、僕のものに触れた。ピリツとした刺激に、針を刺されたときのような声を出してしまって……。

「ごめん、痛かった？」

心配してくれた瑠瀬に、気持ちよかったですと伝える。

「よかった……このまま続けるからね。こうやって、優しくして……うん……はあ……触っているだけでエッチな気分になってきて……早くほしくてたまらなくなっちゃう」

余った包皮を剥かれ、真っ赤な亀頭が姿を現す。それから徐々にズリ下ろされていき、空気に接する面積が増えていく。そうして——エラを張ったカリ首まで露わになった。

聖母のような手つきで、大人の体にくれた。

そのときの快楽は絶大で、全身に強い電気が走ったようだった。敏感な亀頭すべてが露出し、瑠瀬に握ってもらえているのだから当然だ。

性知識に詳しくても実物は初めてらしく、僕のことをまじまじと見つめている。恥ずかしくてたまらないが、やめてとは言えなくて。

「ほんとにこんな形してるのね。それで……これが尿道口？　なんだかヒクヒクしてる……触ってもいい？　……竿はこんなに硬いのに、亀頭ってすごいプニプニしてるのね。……あっ、ごめん、痛かった？」

つんつんと突っつかれる度、頭がピリピリと痺れ、苦しさを感じさせる声が漏れてしまう。

「やっぱ、このままだと痛いね。すぐ楽にしてあげるから……ちゅっ……」

突然襲い掛かってきた破格外の刺激に、女の子のような嬌声をあげてしまう。

向かい合っていた瑠瀬の顔が下がったかと思うと、亀頭の先端に口づけをしていた。

「可愛い反応するのね……。その……入れる前に濡らしておかないとって……。舐めてあげるから、気持ちよくなったらさっきみたいな声出して。あなたの可愛い声、いっぱい聴いてみたいの」

また股間に顔を持っていく。

この行為をされているところを妄想して、いつも一人で愉しんでいた。それをされるとわかると、期待で大きく脈打つ。

「はむっ……じゅる……れろお……ちゅるる……」

どんなことをされるのか理解できていたのに、どれほど気持ちいいのかまったくわからなかった。啞えこまれるのがここまで良いなんて知らなくて、腰がビクンと跳ねる。

「ちゅる……れろ、れろり……んはぁ……んれろ……」

ねっとりとした舌が竿全体を伝う。ぬめりや生温かさに慣らしてもらっているような動きだった。

くすぐったい気もするが、お風呂に浸かっているような温もりに、とろんと目を蕩けさせてしまう。

「んふ……どう？　ちゅる……ひもちいい？　ちゅぶ……」

この状態で喋られると、息がかかり、また違う気持ちよさも感じられる。加えて、上目遣いをしながら股間でもぞもぞと動いていれば、それだけで勝手に興奮してしまう。

それでも、何分か経つと物足りなくなってしまうて……。

「……んう？　はぁ……満足してない顔ね？　いいわ……本気でしてあげる」

どことなく冷たい言い方だった。それに、口端もニタアと広げていて、不吉な予感がある。生ぬるい責めから一変、今までと比べ物にならないほどおぞましいものに変化した。舐める、しゃぶるという表現では収まりきらない。溶かすと呼んだ方が好ましいものだった。

男性上位の行為、女性の奉仕活動ではない。完全に女性上位の行為だと、体中に流れる快感から痛いくらいにわかる。

「じゅる……じゅるり……んれろ……ちゅぶるる……」

口内は唾液で満たされていて、ぬるぬるした涎を纏った舌が触手のようにちろちろうごめく。カリ首に巻き付き、その段差に食い込み、敏感な箇所を狙い撃ちにされる。舌先を固め、亀頭や裏筋を突くような動きにも魅了されてしまう。

「ちゅる……んん……ちゅう……ちゅるり……んちゅ……じゅるり」

頬肉も十二分に使った責めで、キュツと締め上げられ、ただならぬ圧迫感に襲われる。かと思ったら、頬の力を緩められ、生暖かい空気にさらされる。

男なら喘がずにはいられない快楽を送られ、気持ちよさを表す声が漏れ出て止まらない。初めの我慢はあっけなく崩れ、溜瀬の口技に溺れた僕は、可愛いと言っていた情けない声をあげ続ける。

快楽に歪んだ顔のまま、激しく上下する頭部を見ると、目があってしまう。その表情は、小悪魔よりも淫靡で、僕の痴態に満足しているようだった。

巧みな性技が怖くなり、途切れ途切れになりながらも、どうしてそんなに上手なのかと問いかける。

「じゅるり……ん？　いつも……んじゅる……あなたを……ちゅる……おもいながら……んはぁ……おもちゃであそんで……」

話すときの息遣いや呼吸音、それさえも快楽に変化し、狂おしい刺激を与えてくる。壊れかけの頭で、なんとか整理していく。一人で愉しむために、男を象ったおもちゃを啞

えて舐めしゃぶっていた。それも、僕を想いながら。だから、こういう行為には慣れているらしい。

「でも……あなたのより、んちゅる……おもちゃの方が大きくて……じゅる……ちゅると意外で……ちゅるるる……」

その一言が、胸に深く突き刺さる。作りものの方が立派なんて、雄の価値を全否定されたようなものだ。

やかんが瞬時に沸騰するほどの悔しさが湧き上がる。その屈辱も快楽に変わり、悔しいけど感じてしまうという状況に、どんどん快楽指数が高くなっていく。

そして、射精したい気持ちが強くなる――

このまま出したらどうなるんだろう。えづいたりするのだろうか。ゴクンと音を立てながら、美味しそうに飲んでくれるかな。

生温かい口内粘膜に包まれながら、満足いくまで射精したい。その考えが脳を支配し、尿道口からとろとろとしたものが溢れだす。

「……んう？　じゅる……はぁ……これって我慢汁？　その……射精しなくなったら出るのよね？　もしかして、もう出したい？」

その問いにコクンと頷く。

「ごめんね。ちゅと舐めて終わる予定だったのに、スイッチ入っちゃって……。この言葉を嫌う人がいるのは知ってるけど、出すならこっちにしてほしいの。私……あなたのがほしくて……あなたと赤ちゃんを作りたくて……お願い」

確かに、滾った状態で本番に移るのは苦手だ。だが、今はそんなこと思わない。これは性行為ではなく、子を宿すための生殖行為。

瑠瀬に直接注ぎたい。

「……それじゃあ」

ゆっくりとスカートを下ろし始め、純白のショーツが見えてくる。既にぐっしり湿っていて、僕を欲しがっているようだった。

「私ももう我慢できなくて……」

最後の布をずらしていく――初めて目にした瑠瀬のそこは、うっすら茂っていて、透明な液体で濡れそぼっていた。

「一緒に気持ちよくなろ」

耳元で囁かれ、脳内が瑠瀬一色に染まる。瑠瀬とセックスしたい。頭にあるのは、ただそれだけだった。

「きゃっ！」

性愛衝動が限界を超え、押し倒してしまう。可愛らしい驚き方で、情欲が増幅される。

「……もう、大胆なんだから」

自覚はあるが、我慢できなかったのだ。

女の子を知らないせいで、これからどうすればいいのかわからなくて……そんな僕を見かねて、最愛の彼女がリードしてくれた。導かれるまま、最高の行為の一手手前までたどり着く。

後は、体で愛を感じあうだけだ。

「その……優しくしてね」

ゆっくりと入れていく。

そして——ヌチャリという卑猥な水音と共に、とうとう繋がった。

「んっ……いい、痛ッ——！」

痛みが伴うのは本当のようで、苦悶の声を上げる。結合部から鮮血が流れ、どうしても心配になってしまう。

「ん、大丈夫だから。ちょっと痛かったけど、それ以上にとっても幸せなの。ようやくあなたと繋がれて……」

それを聞いて、これまで生きてきた中で、格別の歓喜と感動が体中を駆け巡る。もちろん、至上の快楽も下腹部から全身に広がっていく。

こんなにも気持ちよくて幸せだが、これはただ入れただけ。今から、本格的な生殖行為を始める。

「動いて……あなたの男らしさを感じてみたいの」

僕が雄だと刻みつけるため、瑠瀬自身を突いていく。

一突きするたびに、爆発的な快楽に襲われ、真っ白な火花がパチパチと散る。

入れていくと、歓迎するように肉ヒダが纏わりついてくる。引き抜こうとすると、放さないでと抱き留めるように、肉ビラが追いつがつてきて……。絶対に離れたくない、最後の最後まで愛してと言っているかのように、ヒダ一本一本までもが絡みつく。

「ッ、はぁ……それ、好き……もつと……」

嬌声をあげれば、瑠瀬の中がキュッと収縮する。

全身を溶かす灼熱の快楽で、腰の動きが止まってしまうようになるが、愛を確かめ合うために、強くまた優しく突いていく。

「んう……いい、気持ちいい……ふう……嬉しい……んはぁ……」

密着状態のおかげで、胸元からドクンドクンと激しい鼓動が聞こえてくる。

視線を下にずらすと、天を向くように勃起している乳首があった。その美しさに、また目が奪われ、欲しくてたまらなくなる。

乳首を吸って、甘噛みして……極上のデザートにかぶりつくように味わい尽くす。当然、肉ヒダの愛を感じながら。

「はぁ……急に乳首舐められたら……んんッ……気持ちよすぎて……頭おかしく……もつと、もつとして……」

可愛くエロすぎる声で懇願される。返事の代わりに、より情愛を持って、腰を前後させて

いく。

締め付けが段々強くなる。気持ちよすぎて、もう身動きが取れなくなりそう。それでも、愛するために抽送運動はやめられない。

「んああッ……いい……好き、ずっと好きだったの……んッ——あなたと出会えてよかった……」

その言葉を受け、今までの記憶がよみがえってくる。身バレして、友達になった日。昼食を食べ、下校もした。友達関係が崩れ、ずっと悩んでいたこと。恋人になった瞬間。瑠瀬の過去を理解して、トラウマを打ち明けた初めてのデート。サキュの宮さんとのコミフェ。それから、ずっと一緒に過ごしてきた。

僕も、瑠瀬と出会えてよかった——出会えたからこそ得られた幸せが、数え切れないほどたくさんある。

そして今、二人で最高の幸せを作ろうとしている。

瑠瀬の中で大きく脈打つ。

「射精しそうなの？　お願い、出して……たくさん出して！」

ぐつぐつに煮えたぎった精子が、睾丸の中で暴れまわっている。もうこの想いを抑えきれそうにない。

「……好き、好き！　大好き……愛してる！　一緒に……一緒に気持ちよくなる！」

ありったけの愛情を口にくれる。

それがトリガーとなって、射精が始まった——

張りつめた亀頭から、勢いよく大量の精液が迸る。尿道口から灼熱の白濁が飛び出し、瑠瀬を白く染め上げていく。

「んッ……あ、ああああ——！！！」

腰を揺すりながら子種を注いでいると、艶めかしい声をあげながら彼女の体がビクンと跳ねる。僕たちの想いが、シンクロを引き起こしたようだ。

射精は一瞬では止まらず、何度も何度も愛情の証を打ち付けていく。絶えず脈動を繰り返し、精を吐き出しても、また次の白濁が尿道口から姿を現す。

それが数回も続き、最後に少量の子種が溢れ、ありったけの愛情と精液を捧げた長い射精がようやく終わった。

「……幸せ……とっても幸せ。ありがとう……」

潤んだ瞳の瑠瀬が愛おしく、ギュッと抱きしめる。言葉なんてものはいらぬ。抱き合うだけで、どんな気持ちでも理解することができる。

今の僕たちは、心も体も一つになっている。世界で一番幸せだ。

瑠瀬に注いだ愛情の証で、幸福が芽生える日が待ち遠しい。

アフター 性活は朝食のあとで

「……おはよう」

寝ぼけた頭で、当たり前となった挨拶を口にする。この言葉が、僕たちの日常の始まり。

「おはよう」

朝から最高級の微笑みが返される。僕の恋人——いや、妻のとびきりの笑顔だった。

「そういえば、香子さんは？」

「締め切り直前らしいわよ」

新居を考えたのだけど、部屋一つ余ってるし、一人は寂しくなるからウチ使えと言ってくれたので、咲ノ宮家に住まわせてもらっている。

「ねえ？ ちょっといい？」

「どうしたの？」

「この世界にサキュバスっていると思う？」

相変わらず瑠瀬の興味関心は変わっていなくて、サキュバス好き娘のままだ。

「どうだろうなあ……？ 瑠瀬は？」

「いるに決まってるじゃない！」

本物を見たことがあるような口調に、呆氣に取られてしまう。

「って、私はいいのよ。あなたはどうかなの？」

なんでこんな話を振ってきたのか、心当たりがある。

妖しさにゆがんだ瞳が、視線の圧力が、精神をすり減らしていく。

「……いるんじゃないかな」

「へえ……。だから、わざわざこんなところまで行ったのかしら？」

その手には、クラブ・サキュバスと記されたカードが握られていた。いわゆる風俗店の会員登録だ。

「これ、あなたの名前が書いてあるし、何度も使っているようだけど」

言い逃れできない——許してください、そう必死に頭を下げる。初めて話したときと同じシチュエーションに、どこか懐かしさを覚えてしまう。

「あなたがそんな人だったのはわかってるし、サキュバスって単語に心躍るのは仕方ないわよ。私だってそうだし。……で、どうだったの？ どんなことされた？ 格好は？ 店の様子は？ 詳しく聞かせて！」

いきなりスイッチが入るのにも、もう慣れた。

今のテンションから、恐ろしいことは起こらなそうで一安心。

内装を伝えようとするが、緊張していたせいなのか、まったく思い出せない。プレイも、ベッドで寝かされたところまでしか記憶にない。

「うーん。実際に見てみないと難しいものがあるわね」

「だったら、取材で行って見たらどう？ たぶん大丈夫じゃないかな」

「その手があったわね！ そうと決まれば、早い内に聞きに行かなきゃ！」

喜んでくれているようで何より。これを通して、サキユバス風俗店の作品ができれば、僕だって大喜びだ。瑠瀬の同人作品は、相変わらずめっちゃシコなんだから。

「それじゃあ、朝ご飯にし……」

「まだ話は終わってないわよ」

背筋が凍るような音声で、そう告げられる。やっぱりそうなるのか……。

「私じゃ満足できなくなった？」

「いや、そんなことは……」

「風俗はダメって言ったでしょ。約束を破る悪い人にはお仕置が必要ね。あなたは私専用のものだって、徹底的に教え込んであげる。前みたいに、気絶するまでしないから安心して」
「うう……」

恐怖で体が震える。今夜起こるであろう地獄の責めに、絶望に染まった声をあげてしまう。だが、それを期待している自分もいた。

「どんなことされたい？ リクエストがないなら、やってみたいのがあるんだけど」

「……優しいのがいい」

「なによ、いつも優しくしてるじゃない」

「いつも？」

「ふーん、今日は厳しくしようかしら？」

「ごめんなさい、瑠瀬の愛は優しいです」

「ん、わかればよろしい」

トントンと階段を下りる音が聞こえてくる。

「瑠瀬、やるのは構わんが、黙ってやってくれよ。明日締め切りだから、邪魔されちゃたまらん」

香子さんが、リビングに降りてきた。娘の暴走を止めず、追加注文までしてきたんだけど。そして、元気の源である栄養ドリンクを数本手に取って、また二階に上がろうとしている。

「……じゃあ、あれに決まりね」

悪意に満ちた笑顔が怖い。怖すぎる。

一体何をされるんだ。猿ぐつわでもはめられるのか。というか、いじめられるのは、すでに確定しているみたいだ。

「いや、えっと……もっと体を大事にした方が……」

なんとか制止を試みる。絞り出した理由はもったもなもので、瑠瀬の体に負担をかけるのは申し訳ない。

「心配ありがとう。……でも、別にセックスするわけじゃないんだし、大丈夫よ」

やっぱり、彼女には逆らえないんだなあ。

「あ、そうそう、晩飯前になったら呼んでくれ」

脇から口を挟まれる。もしかして、夜まで仕事をするつもりなのかな。

「わかったわ」

「頑張ってください」

無理やり会話を中断させられたことで、一緒に朝ご飯を食べることにした。僕にだけ、鉄分や亜鉛を多く接種できる料理を出しているんだけど……気のせいかな。

「夕食は、奮発してうなぎにしたいんだけどいい？　ほら、そういう日でしょ。あれ、違ったかしら？　まあ、いいでしょ？」

「う、うん……」

絶対わざとだ。精力をつけさせて、愉しむつもりだ。そんな手を使ってくる瑠瀬が、鉄しいけれど可愛くも思う。

「それじゃあ、いただきます！」

「いただきます！」

香子さんに見守られながら、二人——いや、三人で、今日もそしてこれからも幸せに過ごしていく。